2001年～2002年

国際ロータリー第2740地区

第23回ロータリー青少年指導者養成セミナー

RYLA記録

2002年3月16日（土）・3月17日（日）

佐賀県黒髪少年自然の家

第2740地区RYLA委員会

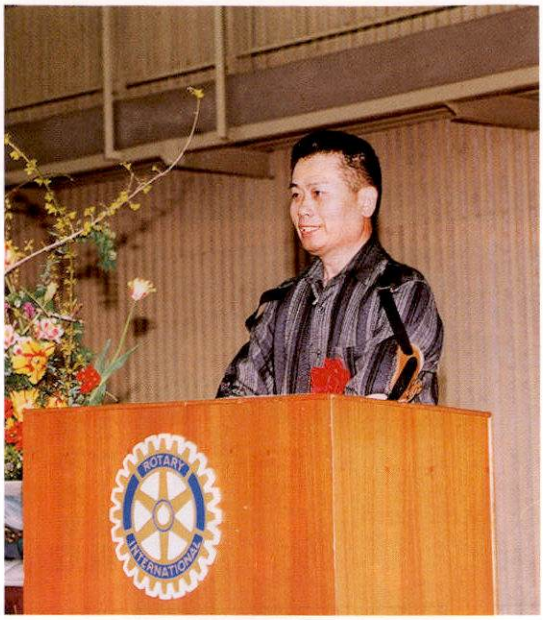
ホストクラブ　鹿島ロータリークラブ

コ・ホストクラブ　武雄ロータリークラブ

嬉野ロータリークラブ

有田ロータリークラブ

記念講演
「天命に生きる」
講師　大野勝彦氏



「失って見えてきたもの」

「今生きている」「まだ生きていられる」

花束の贈呈

詩画集も完売 !!

何んて書いてもらったのかナァ…。

出逢い

（焼物・絵付け）

笑顔の輪

人生、今が本番

座右の銘です。

真心、一心、一念

将来の夢…。

笑顔は天の心

集い、語り、

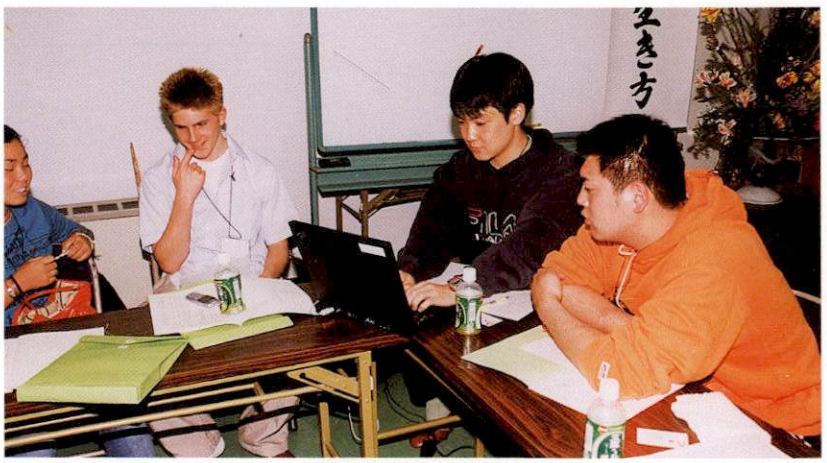
グループディスカッション（大研修室）

すばらしい結束

無心に咲くから美しい

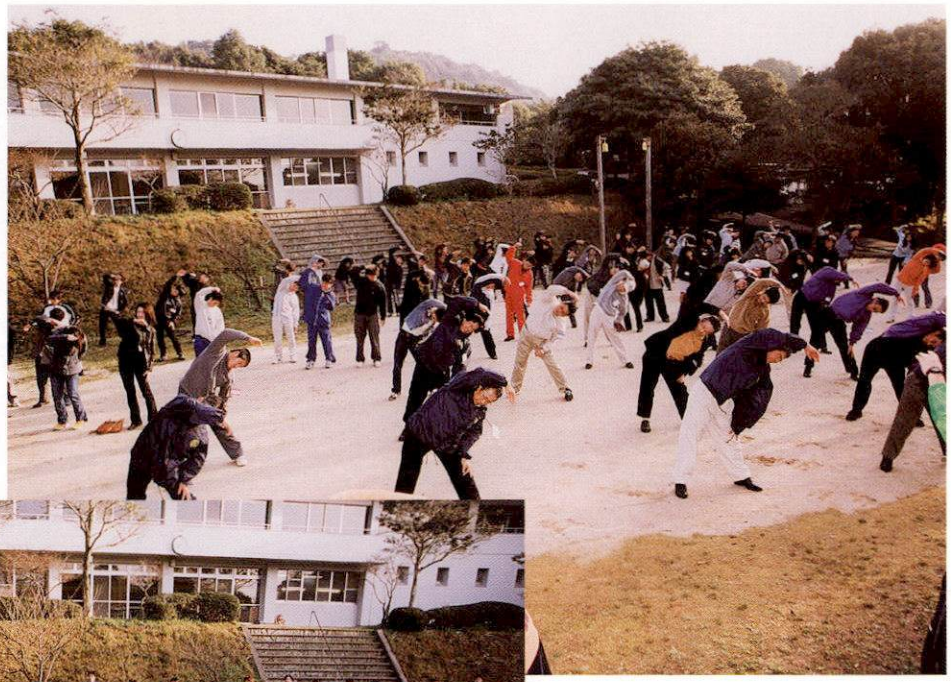
うまくまとめてね！

徳村さんの名指導ぶり



国際交流です。

ときめき



（早朝のラジオ体操）
もっと元気よく !!▶

▲まだねむたいナァ…。

▲蒲原さんの訓示

洗っているの？遊んでいるの？

おいしく「いただきま～す。」

21世紀をどう生きるか

◀グループディスカッション

久し振りですね！

一致団結して

▲終了証書授与「ご苦労様でした。」

◀再会を楽しみに

目　次

開講挨拶 …… 2

RYLAの誕生・趣旨 …… 3

第2740地区RYLAのあゆみ …… 4

プログラム …… 5

ガバナー挨拶 …… 7

来賓ご挨拶 …… 10

歓迎の言葉 …… 12

記念講演 …… 13

グループディスカッション …… 29

グループディスカッション報告 …… 33

RYLAに参加して …… 39

受講生代表挨拶 …… 50

講　　評 …… 51

挨　　拶 …… 52

閉講のことば …… 53

手に手　つないで　また逢いましょう …… 54

登録者名簿 …… 55

実行委員会組織 …… 63

RYLA決算書 …… 64

開講の言葉

佐世保中央ロータリークラブ
ＲＹＬＡ地区委員長　吉牟田　茂

皆さん、本日は第23回ＲＹＬＡ（青少年指導者養成プログラム）にご参加いただきまして本当にありがとうございます。私、地区委員としてＲＹＬＡに携わって５年目になりますが、今年が一番いい天気に恵まれました。昨年長崎では雪が降りました。一昨年唐津での開催では雨が降って風も相当強かったし、その前私が所属する佐世保中央ロータリークラブがホストしたときも風と雨。というようなことで大変な天気ばかりでした。今回は天気も良く、明日も暖かい一日が続くであろうと思っております。今回、こうして当地で開催できますのは、ひとえにホストクラブであります鹿島ロータリークラブ、そしてコ・ホストクラブである武雄、嬉野ならびに有田ロータリークラブの方々のご協力の賜物と深く感謝致しております。又、本日この会場をご提供下さいました佐賀県黒髪少年自然の家のスタッフの皆様、本当に色々とありがとうございます。今日、明日と２日間ご迷惑をかけるかも知れませんが皆様のご協力をよろしくお願い致します。

それから佐賀県教育委員会 松尾教育長様、山内町 永尾町長様にも本日ご出席をいただきまして、このロータリーのＲＹＬＡのプログラムを開会できますことを本当に嬉しく思っております。

さて、ＲＹＬＡは国際ロータリーの重要なプロジェクトの一つです。その目的は皆様のガイドブックにも記してありますように若い人々の指導力と善良な市民精神、国際理解など平和に貢献する資質を伸ばすことでございます。

又、ロータリアンも青少年と共に行動し汗を流し、感動を共有することで若い人々との考え方や夢を理解できるよう努める場でもあります。今回は熊本県の大野勝彦様から「天命に生きる」ということで講話をいただき、そのあと色々なプログラムを進めていく予定であります。私もこの５年間、ＲＹＬＡに関わりまして、10代、20代、30代前半の若い人達の考え方に、やっぱり時代の変化があるのだなぁ... とつくづく感じております。今回、ディスカッションでは「21世紀をどう生きるか」「男の生き方、女の生き方」という、これからの皆様に関わりのあるようなテーマでプログラムを組んでいただいております。

又、例年ＲＹＬＡには国際青少年交換学生が参加致しておりますが、実は本日諫早の方で行われておりますロータリーの別の会合に出席しており、夕方にはこちらに参加する予定でございますのでその交流の方も図っていただければと思います。

最後になりましたが、今回のＲＹＬＡ開催のため昨夏より委員会を重ねて企画、準備に当られた鹿島ロータリークラブ濱松会長様、幸尾幹事様、山口実行委員長様はじめ実行委員の皆様方に深く感謝申し上げます。

新世代の皆さんと、ロータリーの皆さんと今日、明日の２日間、楽しい、そして実のある交流が図れることを願い開講の言葉とさせていただきます。皆さん２日間頑張って下さい。よろしくお願い致します。

ＲＹＬＡ

(Rotary Youth Leadership Awards)

ロータリー青少年指導者養成セミナー

ＲＹＬＡの誕生

ＲＹＬＡの起源は、1949年にアメリカで設立された「指導者キャンプ」までさかのぼります。
現在のようなＲＹＬＡ「ロータリー青少年指導者養成セミナー」となったのは、1959年からです。
1959年、オーストラリア・クィーンズランド州は、自治権獲得100周年の祝典を開催しました。
イギリスのエリザベス女王は、この祝典に、アレクサンドラ王女を名代として派遣されました。
アレクサンドラ王女が祝典に参列されるというので、歓迎の催しとして、王女と同年代の青年達を招いて100周年祝典に参列させ、王女とも会わせようという計画が持ち上がりました。この計画のホストを務めたのが、ブリズベーンロータリークラブです。オーストラリアの各地から集まった青年リーダー達の資質の良さに感心したロータリアン達は、この催しを毎年行うことにしました。各クラブから選ばれた２名ずつの青年をブリズベーンに招待し、１週間、文化・社会・教育プログラムに参加させることにしたのです。
こうして、ＲＹＬＡは、第260地区（現在の第9600地区）で誕生したのです。
そして以後、この青年達の集いがセミナーとして慣例化し、同じようにヨーロッパやカナダにも広まり、1971年、国際ロータリー理事会で、全世界的なプログラムとして採用されました。

ＲＹＬＡの主旨

ＲＹＬＡ〔ロータリー青少年指導者養成プログラム〕は、青少年とロータリアンが活動を共にすることで若い人の指導力と善良な社会人としての資質を伸ばすことを目的としています。

ＲＹＬＡは、ロータリーの地区の重要なプロジェクトです。

ＲＹＬＡ参加の青年達が、社会的な責任を自覚して、多くの人と知り合い、自分の世界を広げ、新しい時代を担う指導者として、各分野で活躍されることを期待致します。

第2740地区ＲＹＬＡのあゆみ

		〈ホスト〉	〈会　場〉
第１回	1979～'80年度（'80年５月）	国際ロータリー創立75周年記念	長崎・親和の森
第２回	1980～'81年度（'81年３月）	門司西・小倉東	英彦山・青少年の家
第３回	1981～'82年度（'82年５月）	有　　田	佐賀県黒髪少年自然の家
第４回	1982～'83年度（'83年３月）	諫　　早	諫早少年自然の家
第５回	1983～'84年度（'84年４月）	鳥　　栖	基山町・瀧光徳寺
第６回	1984～'85年度（'85年２月）	雲　　仙	雲仙・青雲荘
第７回	1985～'86年度（'86年２月）	佐 賀 北	大和町・龍登園
第８回	1986～'87年度（'87年３月）	長 崎 東	諫早少年自然の家
第９回	1987～'88年度（'88年11月）	佐世保東	長崎県立佐世保青年の天地
第10回	1988～'89年度（'89年２月）	唐 津 東	厚生年金休暇センター
第11回	1989～'90年度（'90年２月）	長 崎 南	諫早少年自然の家
第12回	1990～'91年度（'91年２月）	佐 賀 西	佐賀県北山少年自然の家
第13回	1991～'92年度（'92年11月）	大　　村	千々岩少年自然の家
第14回	1992～'93年度（'93年５月）	佐世保北	長崎県立佐世保青年の天地
第15回	1993～'94年度（'94年２月）	唐　　津	佐賀県北山少年自然の家
第16回	1994～'95年度（'95年３月）	長 崎 西	国立諫早少年自然の家
第17回	1995～'96年度（'96年３月）	有　　田	佐賀県黒髪少年自然の家
第18回	1996～'97年度（'97年３月）	佐　　賀	佐賀県北山少年自然の家
第19回	1997～'98年度（'98年３月）	島　　原	島原・九十九ホテル
第20回	1998～'99年度（'99年３月）	佐世保中央	長崎県立佐世保青少年の天地
第21回	1999～'00年度（'00年３月）	唐 津 西	佐賀県波戸岬少年自然の家
第22回	2000～'01年度（'01年３月）	長崎中央	長崎・式見ハイツ
第23回	2001～'02年度（'02年３月）	鹿　　島	佐賀県黒髪少年自然の家

2001～2002年度　国際ロータリー第2740地区

第23回　ＲＹＬＡプログラム

【第１日目】３月１６日（土）

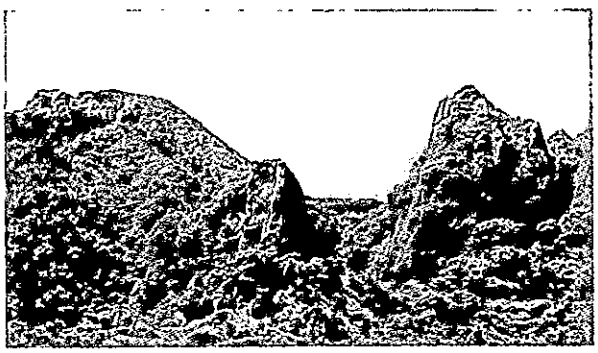
１２：００～１３：００	登録受付	
１３：００～１３：４５	開講式　（体育館）	
―開講式式次第―		司会　折敷瀬三徳
点鐘	ホストクラブ会長	濱松　和夫
国歌斉唱	「君が代」	
ロータリーソング	「奉仕の理想」	
来賓紹介	ホストクラブ会長	濱松　和夫
開講の言葉	ＲＹＬＡ地区委員長	吉牟田　茂
ガバナー挨拶	地区ガバナー	福井　順
来賓挨拶	佐賀県教育委員会教育長	松尾　正廣様
来賓挨拶	山内町　町長	永尾　光義様
歓迎の言葉	ホストクラブ会長	濱松　和夫
１３：４５～１４：１０	休憩　（記念撮影）	
１４：１０～１５：２０	記念講演　（体育館）	
	講　師：大野勝彦氏（熊本県）	
	テーマ　「天命に生きる」	
１５：３０～１５：５０	連絡事項報告　（施設利用の注意）	
	黒髪少年の家所長　副島　利彦様	
１５：５０～１７：４０	会場移動　体育館（焼物　絵付け）	
１７：４０～１８：００	会場移動	
１８：００～１９：００	夕食	
１９：００～２１：００	グループディスカッション（大研修室）	
〈テーマ〉	（Ａ）２１世紀をどう生きるか	
	（Ｂ）男の生き方・女の生き方	
２１：００～２２：３０	入浴・自由時間	
２２：３０～２２：４５	就寝準備	
２３：００	消灯	

【第２日目】３月１７日（日）

７：００	起　床	
７：３０～　８：００	朝の集い	
８：００～　９：１５	朝　食	
９：１５～　９：３０	休憩・移動	
９：３０～１１：２０	グループディスカッションテーマ別発表	
１１：２０～１１：３０	休　憩	
１１：３０～１２：００	閉講式	

－閉講式式次第－

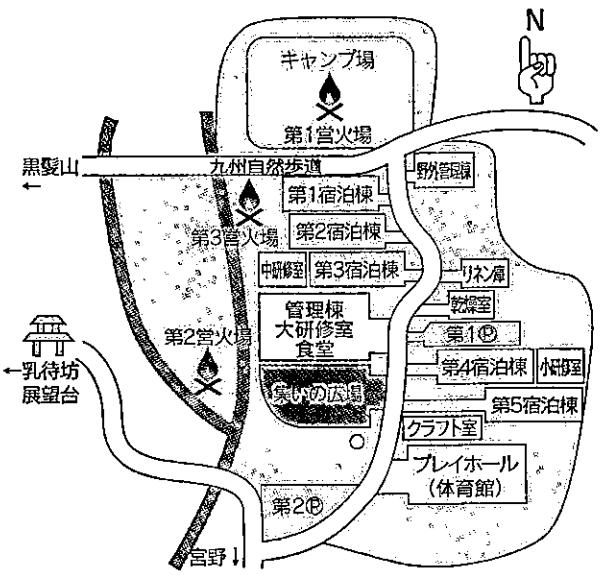
点鐘	ホストクラブ会長	濱松　和夫
セミナー終了証書授与	ホストクラブ会長	濱松　和夫
受講者代表挨拶	長崎ローターアクトクラブ	戸村　大助
講評	ＲＹＬＡ地区委員長	吉牟田　茂
挨拶	ＲＹＬＡ実行委員長	山口　健一
ロータリーソング	「手に手つないで」	
閉講の言葉	次年度ＲＹＬＡ地区委員長	蒲原　孝之
点鐘	ホストクラブ会長	濱松　和夫



佐賀県黒髪少年自然の家

（株）佐賀県教育文化振興財団

●黒髪少年自然の家マップ●



ガバナー挨拶

国際ロータリー第2740地区
ガバナー
長崎南ロータリークラブ　福　井　　順

皆様こんにちは。今日は大変素晴らしい、いい天気で、これは私が出席したからじゃないかと自分で思っています。実は一昨日は長崎琴海ＲＣの10周年ということで行って参りました。昨日は佐世保から伊万里の方に廻って、今日こちらに参加しましたが、これからもう一度諫早の方の会合に出席しなければなりません。皆様方と一緒に一晩を過ごすことが出来ないのは非常に残念でございますけれども、今日ここで話をするということでの時間を与えていただきましたので私の考えなりを少し皆様にお話してみたいと思っております。

今日のテーマが「21世紀をどう生きるか」ということだそうでございます。私は生きるということについて「限界」というものは必ずあるということをいつも考えております。どういうことかと申しますと、三つございまして、一つは「死なない人間はいない」ということであります。これはもう確実であります。死なない人がいたら私に教えていただきたいのでありますけれども、２番目が「明日のことは分からない」ということなんですね。それはどういうことかと申しますと、たとえば昭和57年の7月23日に長崎は大水害を受けまして299人の方が亡くなられました。その時に299人の方がその日の朝に起きられて今日が自分の命日になるということを悟った人がいるでしょうか。全然そういうことはないと思います。昭和60年だったかと思いますけれども540名を乗せたジャンボジェット機が羽田空港を飛び立った後、山に激突して4人は助かったそうですが、あと全員が亡くなられました。その時に搭乗された方が、その飛行機が落ちると思って乗られた方は一人もおられないと思うんですね。ということはどういうことかと申しますと、明日のことは分からない、私も此処でこれだけ喋っておりますけれども、今から急いで諫早に帰る途中に暴走トラックが来て激突した時には、明日の朝刊の死亡広告欄に私の名前が載るということになるわけでございまして、これも全く分からない、だから死なない人はいない、明日のことは分からない。第３番目に確実なことはですね、「一日24時間であるということ」これは誰でもが24時間であって、ある人が26時間で、ある人が23時間であるということは絶対にありません。自然の中にある草木、昆虫、動物、それから植物あるいは石に至るまで地球上にあるものはすべて全部公平で一日24時間、この三つの限界の中に私達は生きるわけです。その点をぜひ皆様方と一緒に考えてみたいと思います。

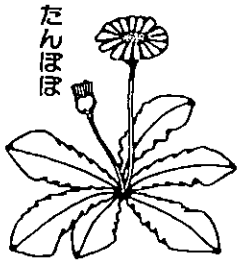
私此処で、こういうふうに喋っておりますけれども実は今から約57年前のことでございますが、昭和20年の8月9日には原子爆弾の落ちた爆心地から約700ｍのところにいました。そこは、長崎大学医学部の附属病院で、その南講堂におりましたが、その時私の同級生で出席したのが129名、助かったのが4名でした。私自身も700ｍという近距離でしたので、大変な放射能を浴びまして、黒い雨にずぶ濡れになって家に帰ってきて、その9月5日からもの凄い原爆症という病気にかかりました。口から出血しますし、口の中が全部腐れてしまって、丁度口の裏から表の方まで穴が通じるのではないかという具合いに真っ黒になりました。歯ぐきが全部腐れたも

のですから、白い骨が剥き出しになり、次々に歯が落ちまして丁度20歳になる頃でしたけれども、その時からこの通り全部入れ歯でございます。これはですね、年をとってから入れ歯になったんじゃなくて、700ｍの近距離に原爆が落ちて口の中が腐れてしまって、もう私の母の話によりますと「ボロ雑巾を絞って布団の上に寝かせたような状況だった。」そうでございまして、その時私を見たある人は「丁度地獄の中で頭の前に三角をして走りながら逃げ廻っているガキみたいだった。」と言っていました。その様な情景で私は布団の上に寝せられていたんですね。自分でも、いつ死ぬのかなぁ、と思うぐらい意識はぼんやりしますし、ある時には布団から鴨居の方向にスーッと吸い込まれる感じがしまして、「あーこれで自分は死ぬのかなぁ。」と思った途端に私の手を掴んで「順さん！」と言って母が叫ぶんですね。その時に現実に呼び返させられるような状態になりまして、又目が覚める、又足の方から鴨居の方に吸い込まれる、まるで雲の上のじゅうたんに乗った様に感じて行くんですけれども、その時に又、母が「順さん！」と言って手を掴む、それで生き返り、生き返りしながらやっと動き始めたのが翌年の2月頃、兄におんぶされながら九大の口腔外科まで行き、口の中の手術を全部受けまして、それからあとは入れ歯でございます。今の年で入れ歯なら結構なんですが、20歳の時に全部入れ歯なんていうことは大変つらいことでございまして。りんごが自分で齧れない、全部自分で擦って食べるということでございます。そんな状況の中で生き抜いてきた訳なんですが、今現在の私の状況を見た人が、私が700ｍのところで被爆して明日死ぬか、明後日死ぬか、という状況に遭った人間と思われる方はおそらく誰もおられないと思います。

実は「21世紀をどう生きるか」ということにつきまして私が今、地区ガバナーとしてここにいる訳でございますね。存在するためには空間が必要ですし、時間も必要でございます。私自身は、とてもガバナーの仕事は引き受けることはできないと考えていましたので、ずっと断り続けておりました。そしたら、私の一年先輩で、長崎北クラブの宮村先生という産婦人科の先生でございますが、この方が私にちょっと話があるから来てくれということで、「松亭」という料亭に呼ばれ、そこで一緒に食事をしたんです。その時に「福井さん、あなたはガバナーになるということを盛んに断っておられるという話を聞いたんだが本当か？」とおっしゃられたので「本当だ」ということを申し上げました。そしたら口をへの字に曲げられて「あなたを自分は見損なった！」ということをおっしゃた訳ですね。「エッ！」と私は思ったところが、何とおっしゃたかというと「あなたは今ここで生きておられて、あの奇跡的な状況からあなた自身は救われた。現在ここに生きているということを何と考えているのか！」と、「あなたと同級生が何人死んだのか、死んだ人は結婚も出来ず、ゴルフをすることも出来ず、勉強も出来ず、字も書けず、ものも言えず悔し涙に暮れて亡くなったに違いない。その中であなたが一人だけ生きて現在のような状況にあるというのに、それははっきり申し上げれば生かされているんじゃないか。」と「いろんな人の助けによって生かされているあなたが、できない！と言ってガバナーを断るということは一体どういう事なんだ。」と「他の亡くなった方が出来ないなんて言うなら判りますよ、但し、あなたが出来ないなんて言うことについては私は絶対に納得出来ない。」という話を伺ったんです。これは私には痛烈な話でございました。私とすれば、この何とか生きている自分自身の存在というものを「ガバナーになれ！」という話でありまして、やる以上はこの宮村先生の話を一生懸命考えてやらなくてはいけない。と、その時思った次第でございます。その他にいろいろ話もございましたが、やっとガバナーを引き受けようかな、と思ったところ宮村先生がお亡くなりになった訳でございます。もうそれは遺言になりまして、

私にすれば何とかこれはやらないと、とても宮村先生の墓の前には出れないという気持ちが強かったんですけれども、結果的に、私は生きてきて良かったと思っております。しかし、「21世紀を生きる」ということに関しましては、もうそう残り時間はありません。私は大正15年（1926年）生まれですから現在75歳です。もう先は長くないんじゃないかと自分では考えているんですが、今日ここで先の未来時間を十分に持っておられる若い人達と一緒になって、ロータリアンの皆様方がここ黒髪少年自然の家で１泊２日、じっくり「21世紀をどう生きるか」ということをテーマにして語り合うことは大変有意義なことだと思います。私自身も何とかこれに参加したいと思っておりましたが体が自由にならずこれで失礼致しますが、皆さんと一緒に「21世紀をどう生きるか」について考えてみたいと思います。人間は一人で生きることは出来ません。必ずどなたかからの救いがあり、あるいは、生かされている状況があり生存しているものなんです。どうせ生存するのであれば、こんな人が居て良かったなぁと、あるいはこんな黒髪少年自然の家のような施設があって良かったなぁと、それから皆さん方一緒に来ていて、こんな先生がいたらいいなぁとか、こんな先輩や大人がいたらいいなぁということをお考えになると思いますし、又大人の方は、こんな若い人達が居たらいいなぁと思うことが沢山あると思います。それは存在価値というものがどんなものであるかということにつきましては、やっと生きて来た者として十分自覚していると思っております。皆様方と一緒にこのロータリーの存在価値を追求する思想というもの、つまりロータリーというのはなぜあるのか、ロータリアンというのはなぜここに居るのか、そしてなぜここで皆さん方と一緒にＲＹＬＡの精神を話しようとしているのか、その点につきまして十分に考えていく必要があるのではないかと思います。今後、私はできるだけ、ああいう人が来て良かったなぁという存在価値、こういう先生、こういう生徒がいて本当に良かったなぁという存在価値を皆さんが一生懸命に探っていくことこそ、世の中や社会というものは良くなって行くに違いない、ということを信じる一人でございます。昨今のニュースを見ますと、雪印の問題、或いは、鈴木宗男さんの問題など盛んにやっておりますけれども、私の小さな時から信じておりました雪印ブランドの存在価値が一挙にしてなくなりました。或いはなぜ鈴木さん自身が議員というもの、或いは自民党というものを離党しなくてはならなくなったのか、その存在価値がなくなってしまったのかということに関しては皆様方は良く胸に手を当てて、どういうことが自分の存在価値を高めるのか、どういうことが自分の存在価値を一斉になくすのか。ヒットラー、ムッソリニー、或いはスターリン、ナポレオン、皆すべて素晴らしい存在価値をもった人達でしたけれども、一挙にしてその人達の存在価値がなくなってしまうというようなことが起こっておりますので、私達自身、沢山のそうした人生を見て来ている訳でございますから、今日は若い方々と、ロータリーの皆さんが一緒になって良く話し合いをしあい、今後の生きていく自分の存在価値の追求をぜひやっていただきたいと思う次第でございます。

どうも長いこと時間を取りまして誠に申し訳ございませんが、これをもちましてガバナーの挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



来賓ご挨拶

佐賀県教育委員会 教育長　松　尾　正　廣　様

県の教育長の松尾でございます。本日、第23回ロータリー青少年指導者養成セミナーが盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げる次第でございます。

本セミナーのように、若い方々が一同に会しまして寝食を共にし、研修に励まれますことを衷心より敬意を表する次第でございます。

さて、皆様もご承知のとおり地域の連帯感の希薄、近年青少年を取り巻く社会環境は大きく変化を致しております。なかでも家族構成の変化や集団での生活、或いは体験不足などによりまして社会のルールを守る心、或いは命を大切にする心、相手を思いやる心、正義感、こういったことが欠如致しております。「豊かな人間性が充分育まれていない」こういった指摘がよく行われるところであります。このような中、ロータリークラブにおかれましては、国際奉仕、職業を通じた奉仕、社会奉仕、更に青少年の健全育成にも積極的に取り組んでおられます。最近、地域社会を活性化させる新たな動きとしまして、地縁や血縁に基づかないで、同じ目的や関心によって結びついた組織の活動も活発化しております。この様な大人達の活動に青少年を参加させていくことに対して、我々は大いに期待をしているところでございます。どうかロータリークラブの会員の皆様におかれましては、さまざまな分野でその活躍が期待されている、民間活力を如何なく発揮していただきまして今後共、家庭、地域社会と連携を図り、常に青少年の心に目を向けながら青少年の豊かで多様な体験活動の場づくり、健全育成にご支援いただきますようお願い致しますと同時に、心豊かで住みよい地域づくりに向けて、更に一層のご協力を賜りますようにお願い申し上げる次第でございます。

最後になりましたが、このセミナーがご盛会のうちに終わりますことを、又そして皆様方のご健勝、ご活躍を祈念致しましてはなはだ簡単ではございますが、ご挨拶にかえさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

来賓ご挨拶

山内町町長　永　尾　光　義　様

皆さんこんにちは。ようこそ私達の、この山内町においでいただきました。ロータリー青少年指導者養成セミナーという非常に重要な、今からの次代を担う青少年の指導者の皆様が、この地で研修されるということに対しまして、私達は非常に光栄に思いますとともに、歓迎を申し上げます。

私達のこの町は、今回のホストクラブであられます鹿島、或いはコ・ホストクラブであられます武雄、嬉野の皆さんと広域圏組合を形成しているところでありまして、又、有田ロータリークラブさんはお隣で、我が街も有田焼ということで非常に繋がりが深い所でございます。そして又、この黒髪少年自然の家は、佐賀県立自然公園黒髪山という中にございまして、沢山の方々がこの自然の家を利用されているところでございます。

又皆様方が過ごされるこの一帯は岩山と言いますか、奇岩で造られました黒髪山でございまして、たくさんの野鳥、或いは希少植物の宝庫でございます。今回、皆様方の研修は「21世紀をどう生きるか」ということで室内研修が主な様でございますが、休み時間などにおきましては、是非、この自然を満喫していただいて、充分活力を得ながら研修に励んでいただきたいと思う次第でございます。本当にこれからの時代を担う青少年育成ということが大きな課題でございますので、皆様方がしっかり研修されまして各地でその指導者となられんことをお祈りし、同時に、益々発展されることを願いまして、歓迎のご挨拶とさせていただきます。

皆様方頑張って下さい。

歓迎の言葉

ホストクラブ　会長　濱　松　和　夫

皆さんこんにちは。

国際ロータリー第2740地区の第23回ＲＹＬＡの開催にあたり、ホストクラブを代表して歓迎のご挨拶を申し上げます。

本日はご多忙の中、ご来賓として佐賀県教育委員会教育長松尾正廣様、山内町長永尾光義様、国際ロータリー第2740地区ガバナー福井順様を始め、ＲＹＬＡ地区委員の皆様のご臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

ロータリー青少年指導者養成セミナー、いわゆるＲＹＬＡとは、青少年とロータリアンが活動を共にすることで、若い人の指導力と善良な社会人としての資質を伸ばすことを目的としています。今回は「生きる」ということをテーマと致しました。ご講演では大野勝彦先生に「天命に生きる」という演題でお話をしていただくことになっておりますし、グループディスカッションでは「21世紀をどう生きるか」、「男の生き方、女の生き方」というテーマで討議をしていただくことになっております。

若い皆さんに“生きる”ということを真剣に考えていただいて、今日、明日の２日間のセミナーで何かひとつでも明日を生きる心の糧となれば幸いに思います。

本日のＲＹＬＡ開催にあたりＲＹＬＡ地区委員長吉牟田茂様をはじめ、各委員の方々にはロータリーの友情で、快くご指導いただきました。またコ・ホストクラブとして、有田クラブ、武雄クラブ、嬉野クラブの方々には大変ご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

最後に、本日ご参加の青少年の皆さんが、新しい時代を担う指導者として大きく成長されるであろうことを期待して、歓迎の言葉とします。

講師紹介

演題「天命に生きる」

～大野勝彦氏の経歴について～

昭和19年２月３日	熊本県菊池郡菊陽町生まれ 高校卒業後、家業の農家（ハウス園芸）を営む
平成元年７月22日	農作業中、機械により両手を切断。入院３日目より、湧き出る“生”への想いを詩に託す。さらに２ヵ月目には、その歓びを水墨画に表現
２年２月	熊本県立劇場で詩画の個展を開催
２年７月22日	１年間書きためた詩を一冊の本「両手への讃歌」として自費出版
３年２月	水墨画集「両手への讃歌」出版
３年７月	「両手への讃歌」で第９回熊本現代詩新人賞受賞
３年11月	山口県萩市にて個展を開く
４年11月	熊本日日新聞社「豊かさ作文コンクール」グランプリ受賞
５年７月	「さよならのあとに」出版
５年12月	障害者芸術祭書画の部金賞受賞
７年10月１日	詩画集「風の丘から一ふり向けば母の愛が一」出版
８年９月８日	講演1000回記念「ありがとう講演会」を熊本産文会館で開く
８年９月	詩画集カレンダー製作
現在	菊陽町で「やまびこ塾」主宰。年齢・職業のさまざまな男女が集い、生き方を語り合う塾で、多くの塾生が巣立つ。熊本ほか各地で講演会を開く。学校や施設、企業など多数。

現住所・〒869-11　熊本県菊池郡菊陽町津久礼616
TEL・FAX 096（232）2322

熊本から来ました大野といいます。45歳まで手がついておりました。平成元年の7月22日に、よく考えてみると、私は自分の意思で手を切りました。でもそこのところがずっとひっかかっていました。初めて手がなくなって一番思ったのは、手は宝物だったなぁという、手は朝から晩まで使っていたのに、自分が生きるために私は、手だけ切ろうと思ったのです。それが許せないと自分が言いました。

わかりやすく事故を説明しますと、お百姓をやっていたものですからその日は、トラクターで仕事をして家に持って帰りまして家の庭でこのトラクターを洗っていたのです、水をかけながら洗車ブラシで大体きれいに洗ってしまったときまでは、両方に手がついておりました。最後に、作業機の大きい箱型の、その中を洗っておりました。これには肥料が入っておりました、さっきまで。水をかけて洗っていたのです、そうしたら、一番下には、一本心棒がありまして、作業中だと回転する機械なのですが。洗うときはエンジンを止めて洗っておりました。ところがです、心棒が一番底にあるものですから、上からどんなに洗っても、心棒の裏のほうが洗えない。ということで、私はこともあろうにちょっとエンジンを起こしてギヤを入れると心棒が回る、回ったら当然裏のほうが上に出てくる、そうしたら上から水をかけたらこの方が早いと思い、最初止めていたのを、わざわざ前にいって、エンジンかけてギヤを入れたのです。それで心棒が回りだしたのですね。それが平成元年7月22日午後3時半ごろのことです。水をかけていました、よく見たら右のほうにごみがのっていた。どんなに水かけてもこのごみが取れてくれないものですから、指でつまんで捨てた方が早いと思って、右手で心棒のごみをつまんだ。心棒に羽根がありまして、私がつまんだときは見えなかったんですが、隠れている羽根が出てきて私の右手をバリバリッとしたのです。“しもうたー、右手を取らねばいかん”今度はとっさに左手が出ました。ぶつっときれるといいんですけど、両方の手が、心棒の下から巻き込んでいって、裏からぺっちゃんこになった手が出てきて、紐みたいに巻かれながら私を引っ張っていきました。大声で助けを呼びました。「誰か来てくれー」、「助けてくれー」、と言ったらですね、運良く家の中におっかさんがいました。それでおっかさんがびっくりして飛び出してきたんですが、うちの母は残念ながらトラクターのエンジンの止め方が分からない。私はぞーっとしたんですね、“うぁー手がいきょうる、おっかさんが来ても止まらん。だんだん入っていって、肘が入って、肩が入って、頭が入ったら一巻の終わり”いろんなこと考える暇がありました。そんななかで思ったのがですね、“おらまだ死なれん。子供は今日も3人学校に行った。学校に行ってただいまと帰ってきたら父ちゃんが死んどった。子供はこりゃ泣くばいな俺は死なれん”と思いました。それでどうしたかと言いますと、だんだん入っていってもういよいよ頭が入っていくところまできたときですね、そういう判断したのです。手を切ろう。この判断するのが一番私がつらかった事だし、そこの何分かが、一番大変だったですね。そして、今度は命がけで手を中に差し込んで、反動をつけて命がけで引いて自分で手を切ってひっくり返ったんです。そこのところがどうも自分で納得できないんですね。自分の手だからこんなこと言っていますが、これが例えばです、両親だったり、嫁

御だったり、これまでずっと世話になってきているのに、俺が生きる為にお前だけ死ねと言っているような気がしてですね、どうも許せない自分がいたんですが、そんなときです、私は都合がよくできておりまして、よく言えばプラス思考なんですが、なくなった手が、「私はあなたの為に喜んで死んだのだから、あなたはその残った体で、ちゃんとやったほうがいいよ」とまぁ、そんな気がするんです。言っているような。そこから始まってこういう手をつけています。

(義手を見せる)

義手と言いますが、これをつけてですね13年です。13年と半分くらいになるのかな、それ以来一回もですね、手が返ってきたことはありません。まぁ当たり前ですね。

こうなって一番思いました。手があったときはたぶんですね、当たり前と思って、ずっと手を使っていました。皆さんもたぶんですね、両腕5本ずつ指があると思うんですが、これは当たり前ですもんね。毎日使ってるのに、ありがとうと言ったことはなかったんですが、なくなってみると、いつもですね、誰かの世話にならないと、生きていられなくなりました。私はですね、手があったときは、勉強のほうは嫌いだったのですが、ずーっと、かっこよく言えば、スポーツ系を歩いてきて、色んなことやってきました。野球やったし、バレーやったし、駅伝やったし、45歳で手をきるころには、そういう監督をずっとやっておりました。体力だけは自信がありまして、町へ行くときは男は胸を張って行かねばいかんというのがずっとありました。一人泣いて頭を下げるのは性分に合わないというのがありました。人がありがとうございますと言えば、当たり前たい俺が世話してやっている。お礼言われるのは当たり前というのでずっと生きてきた気がするんですね。それなのに、突然、両手がなくなった。毎日ですね、反対に今度は、お世話になります、ありがとうございました、明日もよろしくお願いします。こんな生活が始まりました。そんななかで、3日目頃から字を書いておりました。私は手もあった時ですね、正直言って字をかいたことあんまりないんですね。本当そんな生き方やっていたものですから、年賀状もですね、こういう女々しいことは嫁御にお前がやれと言って、私は書かなかった。ところが、手がなくなったら3日目頃から毎日字を書いておりました。今これだけ書けますねぇ、筆を握って字を書くと、完璧に字が書けるんですが、3日目にはこういう手はなかった。この義手ができたのは、3ヶ月目。これがなくてどこで書いたかと言いますとですね、肘の先がちょこっと残っています、両方。日赤病院で、肘に筆ペンを当て、括ってもらって、毎日字書きをやっておりました。友達がよく来てくれまして、友達がよく私に言うんです、「大野君、大変だったねぇ。えっ、字書きょうるね。学校に行きょうるときはあんまり勉強嫌いなやつがなんでそんなに早よ字ば書かなんですか？」と言うのですね。何でそんなに早くから字を書いているか？ということですね。こういう思いがありました。まず、救命センターに連れて行かれて、救急車が着くところで、全部足から点滴とか注射されて、寝かせられていたんですね。1日、2日熱でうなっていました。3日か、4日目になったとき、大体あそこは、面会謝絶と書いてあります。ところが近所のおばちゃん達が団体で来てく

れまして、近所のおばちゃん達になると面会謝絶とか関係ありませんものね。「せっかく来たけん、ちょこっとだけ会わせてあげよ」、ということで入ってきましてね、「よぉ来なった、来なった、やさしいなぁ」と思って、私は「ありがとうございます。」と言ったら、そのいっぱい来たおばちゃん達が、私に開口一番言いました。「勝彦さん、大変だったねぇ、でも言うとくけどねぇ、自殺しようなんて思わんがよかばい。」と、私は自殺しようなんて思ったこともなかったんですが、内心ムカムカしながらですね、「思わにゃいかんですか？」と、言って、よく考えてみるとですね、これも優しさかもしれないと思ったですね。そんななかで、「がんばって」、と言って帰って行きました。しばらくしたらもう一人、引き返してきたおばあちゃんがおりました。何か忘れ物をされたかと思ったら、そのおばあちゃんが、私の枕元でこそっとこういう話をするんですね、「昨日、あなたのうちに回覧板もって行ったら、皆で晩飯食いなりょった。私が大分長く見よったけど、食卓に座っとるごたるが、誰もお箸を握ってご飯を食べる者はおらんかった。それよりもしばらくしたら、3人の子供はそこを立って神棚の下に正座してお祈りを始めた。」そんな話をするんですね。私はそこまで聞いてチョット待ってと思いました。俺は何の気も付かなかった。それよりも自分のことばかり言っていた。手が痛い、昔は手が付いていてよかったなぁとかですね。そこで一番後で後悔したのがですね、手を切ってすぐ気持ちが動揺していたと思うんですが、おっかさんにこんな話をしました。「おっかさん、事故の日、あなたが飛び出してきてからすぐトラクターのスィッチを止めてもらうと俺は怪我しなくてよかったかもしれない。」そんな風に思っていたものですから、つい、おっかさんの前でそう話してしまいました。後でずーっと「こりゃ悪いこと言うた」と思いました。後で見舞いに来るおばちゃん達が、皆言いました。うちの母はすみこと言うんですが、「すみこさんがねぇ、今日も泣きよった。」「私があの時スィッチ止めとけば、勝彦は怪我せんでよかった。代わりたいけど、代わられん。」そんな話なんです。いろいろと考えてみたら、自分に子供がいるからよく分かるんです。子供が機械の中に入っていきよる、下から血がだらだら、肉も多分出ていました。その場にいたのに、スィッチ止めることができなかったのだから、うちのおっかさんは本当につらかったと思いますね。それに私が、そういう話をしてしまい、悪いこと言うたなと思って本当にそれには後悔しました。ともかくですね、よーし、これから先、思ったことはしゃべらなくしよう。どうも、しゃべるとマイナスの言葉が多くてそんな言葉ばかりしゃべっている。今からニコニコしておこう。思ったことをしゃべらないと自分がつらいので紙に書いておこう。それで筆ペンに暮れるのです。毎日これをずっと始めたのです。先ほど読んでもらったのですが、それもそのなかで書いた詩です。文章も書いたことないのに、ずっとそれを7ヶ月間やってきました。そんな中で一番感じたのは、私と違ってほかの人は優しいなと思いました。私は大体、男は体力に自身があって何でもできれば優しさなんていらないと思いずっとやってきました。子供たちにも、そういう躾をやったような気がします。学校に行って、友達がいじめられていたら、いじめる方の手伝いをしたらいい。そんなことばかり言っていたような気がするのですが、

手を切ってこうなると、人の優しさがやけに身にしみました。大体、毎日毎日、うちに皆で手伝いに来ました。私なら友達が入院したら、１回くらい見舞いに行くのですが、１回で終わり。しかし、私の友達は、ほとんど１０回近く来たのではないかと思います。すごいなぁと思いました。もっと思ったのは、３人子供がいたのですが、彼ら達にはもっと強烈に、私は本当に優しさを教えてもらった。何しろ無口でおとなしい息子とか、そういうのばかりがいて、私は育てそこなったとずっと思っていたのですが、彼らは違うのです。ちょうど受験勉強をやっていまして、高校受験、大学受験。それで私たちは、病院の中で、入院していて、嫁御と２人で、「子供が来たら楽しい話ばかりしなくてはいけない、受験勉強の最中だから、ショックを受けたら勉強できなくなるから子供が来たら楽しい話をするぞ」と言って待っておくのです。ところがその３人の子供が夕方来るのですが、皆楽しそうなんです。「父ちゃん、来たばーい」と言うとそこからツーステップで入ってきまして、「あのねー、今日ね、朝早く犬がビューと走って行きよった」「うん、そうか夜が明けよっとね」と馬鹿みたいな話をえらく盛り上げてしゃべっていました。子供が帰った私は、嫁御とよく言っていました。「俺たちが作戦練っておいたから、あいつ達は何も気づかんと、ニコニコして帰った。うん、子供はこれでよし」とか言いあっていたのですが、２０日目頃、例の近所のおばちゃん軍団が又来ました。このおばちゃん軍団が言うのです。中学校３年生の坊主は、隆と言うのですが、「隆くんは毎日、玄関の前に座って、病院の方を向いてこんな風にしとる。なにか考え事をしてずっと頭を抱え込んで、かわいそうで見ちゃおれん」という話をです。病院に来たときにはニコニコしておりましたのでおかしいなぁと思っていたのですが、ずっと後で、長女がポロッと口にもらしました。「あの頃は病院に行く時、私たち３人で、今から父ちゃんのところに行くから、皆で楽しい話ばかりしようと決めてから行きよったもんね」と言っていました。こういうことがだんだん分かってきますと、俺みたいなやつによくこんな優しい子供ができたなと思って、なんだか嬉しくなりました。特に今日若い男子もいらっしゃいますが、頼りにならないと思った息子が、ちょうど事故の現場に帰ってきました。私は機械から手を引き抜いたら、手の中には骨が２本あるのですが、両方骨だけ出ていました。血が噴きだし、おっかさんが悲鳴をあげました。よかったことに親父がいまして、親父が飛んできて、タオルでぐっと括って止血をしてくれたおかげで私は生きているのです。後で病室で寝ていてぞっとしました。現場が畑だったら、誰もおらず、俺は５分後には死んでおった。足を切ったら、ベルトか、ロープを持ってきて、自分で止血できるが、両方の手を切ったら、まず止血はできない。バーッとあの勢いで血が出れば、５分後には出血多量。「あぁ、家で怪我してよかったな」、「親父がいてよかったな」とずっと思っていたのです。ところが、その現場のときは、うちの親父はこうやって看てくれたのですが、後はおっかさんと一緒。のびていたのです。腰が動かない、抜けた。要するに、電話のところまでも行けない。なんと言っても返事すらできない。私は血が出るために手を上げているのですが、救急車も来ません。電話をしていないのですから。疲れてくると手が下がってくる。すると血がボタボタと落ちて上げ

なければ、また疲れてくると下がる。と繰り返していると、だんだん意識がなくなり、ボーッとなり、困ったなと思った頃、中学校３年の息子、隆が帰ってきたのです。ちょうどいいところへ帰ってきてくれました。いつも暗くならないと帰らないのに、その日だけ３時４０分頃帰ってきたのです。「父ちゃん、座んなっせぇ」私は座りました。後ろへ回り、「手」と言うので手をあずけました。私があぐらをかいて座っている後ろへ回って、ひざを立てて座ってくれ、私の両腕を胸につけて２０分以上握っていたと思います。血も全部浴びながら。私は安心して、グラーッとなると、息子が後ろから言うのです。「父ちゃん、がんばらにゃんよ、がんばらにゃんよ」私はその“がんばらにゃんよ”というのがずっと耳に残っておりまして、今でも子供に助けられているという思いでここまできたような気がするのです。それまで、頼りにならないとずっと思っていたのが、“力強いぞ、この血のなかでちゃんと俺の手を握っている”。と思いました。

それから１３年、だんだんうれしくなりました。まず、その隆君がつい先日結婚しました。大学に行き、今は東京に行っていますが、忘れもしません。去年の２月２日、新潟で講演会をやっておりました。私は２月３日が誕生日なのでよく覚えているのです。東京の息子から電話がありました。「父ちゃん、新潟に講演に行くってね、夜会えないだろうか？新幹線に乗ってくれば３時間くらいで着くから」と新潟で会おうということになりました。講演会が終わって、私が会場に「これで終わります」と言い、帰って行こうと思ったら、司会者の人が、「ちょうどここに隆さんがおいでになります」と、息子が来ておりました。「せっかくおいでになりましたので、ちょっとあいさつをしていただきましょう」ということになりました。私は心配しました。息子はしゃべれるのだろうかと思い息子を見て、「ちょっと待てだいじょうぶか？」と言うと、「父ちゃん、大丈夫よ」いけるというのです。「ちょっと待て、お前は今日俺に用があって来たのだろうけど、今から出てきて台の上のマイクで俺に用があるならしゃべれ」と言うと、息子は出てきました。親元を離れているうちによくしたもので、ちゃんと皆さんにお辞儀をしました。「父が大変お世話になりました。私が息子の隆といいます。実はここに、私が来たのは最近、好きな彼女ができました。どうしても結婚したいと思います。お父さん、許可していただけますか？」と会場でこのような話になりまして、私はそんなことを知らないものですから、息子が来るというのが頭にいっぱいありましたので、そこの講演でも今しゃべったような息子の話をずっとしていました。私が今生きているのも息子のおかげのような気がして、息子には本当に世話になっておりますと話をしたすぐに、「お父さん、許可していただけますか？」と言うものですから、うっかりして「はい、許可します」と言って、話がとんとん拍子にいきまして１０月６日が結婚式でした。かわいい奥さんでして、やすこさんというんです。うちの嫁御は、かおりさんというのですが、若いときはこんな顔だったかなと思うのですが、大分違うなと思いました。正月は、連れて熊本に帰ってきました。嬉しかったですね。そうしたら、息子が言うのです。「父ちゃん、赤ちゃんができた」と。それも全然平気なのですね。私たちは赤ちゃんができて親に言うときは、どきどきして顔が赤くなって、な

んて言おうかなと思って言ったのに、息子は全然、「父ちゃん、赤ちゃんができた」です。「いつ生まれるのか？」と言いましたら、「８月」そう言いました。計算が合うのか？１０月結婚して８月。するとうちの嫁御が言いました。「ふんふん、合うことは合うよ」とですね。合っても合わなくてもいいのですが、それが癖になりまして。そうすると、奥さんがうれしいことを言うのです、私に。「お父さん、私が隆さんと結婚しようと思ったのは、もともと隆さんは好きだったのですが、決め手となったのはお父さんの本です。あの本を読んで、この人の息子さんなら一緒になっていいと思った」と言ってくれたのです。それっきり私はうれしくなって、これは半分は俺がよかとかも知れんなと勝手に思っているところなんですが、なんだか１３年嬉しいですね。なんかいっぱいそんなことがありましたねぇ。

機能的には、こういう手なんです。これは作った手なのです。ところが、今考えてみるとこの手になったおかげで、前の何倍といろんなことができています。今日も絵が来ていますが、私は手があったとき絵を描いたことは一回もありません。大体、年賀状も書かないのですから。ところが、知らない人は知らない、知っている人は知っていると言うのですが、今、画家で通っているのです。本人が言わないと分からないのですが、馬鹿ではなく、画家です。去年、一昨年、星野 富弘さんの全国大会に東村に行ったのですね。行くと、「大野さん、あいさつをしなさい」と言うので、私は、星野ご夫妻の前で、あいさつしました。せっかくならちゃんと私らしくあいさつしようと出て行って、「日本のなかで、東の星野富弘さん、西の大野勝彦さんと言われておりまして、誰が言っているかといいますと、本人が言っております。」と言ってうけて帰ってきたのです。今年の５月２５日も星野さんの大会でいろいろ私に講演しろと言うので楽しみにしています。美術館ができました。字なんて書いたことない、絵なんて描いたことないのに、美術館ができまして、本当にうれしいことにいろんな人が見に来てくれています。人間ってすごいなとほんとに思っています。前は言い訳ばかりしていました。言い訳より生き方自体が、こう思っていました。俺は運が悪い。大体生まれた所がよくない。仕事もよくない、百姓だ。両親もあんまりよくない。嫁御ももらい損なった。子供もよくない。友達もよいやつは一人もいない。ずっとそんな思いで、どこを見ても面白くない。これだけがんばっているのに、認められない。ところが、手を切ったら、俺みたいに運がよくて、これだけツイているものはいないのではないか。私だけでなく、私の周囲の人は皆そう言いますし、私も一番そう思っています。俺が一番恵まれているんではないか。今、不景気だとか言いますが、私は毎日仕事を言われて喜んで行くとお礼を言われて、旅行して、しゃべって、絵を描いて。それを１３年ずっとやりながら、覚えているのです。その一番の根っこになっているのが、この手ですね。もっと言わせてもらうならば、手を切ったおかげで、自分のなかに気づいたことからこういう風になったのかなと思うのです。まず皆さんにこれを見せます。せっかくですから、これは義手です。私の手はここまで。この手がないと何も作業ができません。寝るときは、これは重さが２キロくらいあるものですから、こういうのをはずして寝るの

です。そうすると、朝は何もない手があるわけです。ですからこれをつけないと何もできません。朝起きたときから、よーし、今日も世話になるね、ありがとうと言ってつけて始まるのです。これを出して毎日、眺めることが、朝の日課になっていました。ニコニコしておりました。なぜかといいますと、ある時こう思いました。これを見ながら、肘が残っていてよかった。私は生まれて初めて、ありがとうとか、よかったとか思ったのですね。これまで、口ではよく外に行くと、いろんな役を持っていたものですから、ありがとうございました、お世話になりましたと言いながらも、心の中から感謝したことなど１回もなかったのですが、これを見て、肘が残っていてよかった、両方よく残してもらった、要するに、物理的に肘が残っているよりも、自分のなかにありがとうという気持ちがあることがはっきりとしました。その辺からうれしくなったのでした。毎日、ニコニコが止まらなくなった。

親孝行も今までしていない、後で親孝行しようと思っていた。でも今考えてみると分かります。後でしようというのはしないやつの言い訳なのです。する人はすぐするのです。俺は後でしようとずっと思っていました。何もしていないのに、おっかさんに、「あなたがトラクターのスィッチを止めればよかった」とか、もっと親不孝をした。これはいかんと思い、旅先からずっとおっかさんにハガキを書きました。大野すみこさん、母さんの子供でよかった。何度言いかけてやめた言葉だろう。カーネーションが勇気をだせと言っています。大野すみこさん。こういうのを延々と出して、おっかさんが喜ぶようにそして自分ではいっぱしに毛がついたような顔をしてここまでやってきました。ところが、気づきというのは奥が深いと最近一番思いまして、今うちにいるのは、大野すみこさんという私のおっかさん、大野かおりさんという私の嫁御と２人います。この間、旅から帰って、うちに座っていたら郵便屋さんが来ました。「今日もハガキがいっぱい来とるわぃ。」と取りに行きました。見覚えのある私が書いたハガキが入っておりました。「大野すみこさん。今がんばっています。」というハガキが遅れて届いたのです。それを見ながら、思いました。ちょっと待て、いつもならこのポストに取りに行く役は私の嫁御のかおりがしている。取りに行くといつも私が旅に出ている数だけ、「大野すみこさん、今どこに来ています。」というハガキが来る。１０年ばかり出ているのに１回も、大野かおりさんというハガキを私は出した覚えがありません。そのとき本当に思いました。俺は何でこんなに気が付かないだったろうかと。嫁御は本当に寂しい思いをしていただろうと思い、言われると楽だったのですが、１回もそのようなことをうちの嫁御は、私に言った覚えはありません。それで思いました。俺は気がついたなんて言っても本当は何も気づいてない。それから、今は旅先から２枚ですね、「大野すみこさん」、「大野かおりさん」と２枚出すようにしているのです。なんだか気づくというのは奥が深くて、まだそこまでいってないと思うのですが、少しだけそういうのが分かってうれしいなと思うのです。美術館を造ったというのも、本当は最初、星野富弘さんと約束しまして、５年ほど前に。熊本で美術館を造りますと。熊本で個展を始めた時、来られたのですが、１０年後位に造ると言ったのですが、３年位前

にできています。なぜ早く作ったかと言いますと、あと１０年もたてば、親父かおっかさんが死んでいなくなる。親父とおっかさんのどちらかが欠けていれば、美術館を造っても意味がないと思いました。すぐ造ろうと思い、菊陽町に、現場に美術館を造りました。今でも阿蘇に美術館を造ろうと思ってずっとこういった活動をしています。これもあと５年後位には造らないと、私が生きている時間からして、どうしてもお返しをしようとするならば、５年位で造ろうと思ってやっています。菊陽の美術館を見て、塾生とかいろんな人が来られると、言う人は言ったりするのです。「これは無駄じゃないですか。阿蘇に美術館を造るなら、こういうのをちゃんと造らなくてもこれを阿蘇に持っていけば」と言われるのですが、私はこれは大正解だったと思っているのです。なぜかと言いますと、親父が２年前に亡くなった。この中に住んでいました。見学に来ると、親父はにやーっと笑って、喜んでいました。絵をほめる人がいれば、自分が描いたわけでもないのに親父は照れておりました。「そうですかー」と言いながら。自分が描いた絵ではないので照れる必要はなかったと思うのですが。今どこにいっても、母親というのは誰にしても一番大切なものなのですが、父親と言う存在はどうも薄くていかんと思い、最近私は、親父に対する思いをいっぱい書いておこうと思っています。ですから今、本を作っていますが、まえがきを書いて、ちょっとそれだけ引き抜いてきました。今日は、せっかく男の人たちが多くいらっしゃるので、私の親父に対する思いを聞いてもらおうと思います。ちょっと読んでみます。まえがきの所です。　私は、父に怒鳴られた記憶がほとんどない。その分、ちいさいころから悪いことをして、母からこっぴどく叱られた。小学校高学年、中学校にもなると反抗期、母の小言にもなれてくると、またヒステリーが始まったなどと思った。思いは顔に出る。母は涙しながら、ますます声を荒げていく。そんな時親父は、「もうその辺でよかぞ」勝彦も本当は分かっとる。と、私をかばった。そんななか、反抗期がますますエスカレートして、叱らない、叱ってくれない父に私は、親父は私に愛情がないから、無関心なんだというとんでもない思い違いが芽生えていった。家業の農業をし、同じ屋根の下に住みながら、おはようの挨拶どころか顔をあわせぬように、いや、意識して無視していた。あれは手を切断して１週間目頃であったろうか。看病していた妹が、窓の外を見ながら私に言った。「父ちゃんがねぇ、勝彦には言うなって口止めしてるけど、ここ数日でね、７キロも痩せたとよ」彼女の横顔に涙が光っていた。あの親父が、愛情もないと思っていた父が俺のことを心配して夜も寝られず、食事もせず神に祈っている姿がうかんだ。その夜中、どうしても寝付けず、ナースコールを押してもらい、こんな時間に何事かと飛んできた看護婦さんに、「突然ですが、外出の許可を出してもらえませんか？」と言った。「ご冗談でしょう。点滴につながれて、それよりも傷口の化膿が心配です」相手にはしてもらえなかった。一言謝りたい。いや、ありがとうと言いたい。病室に家族とやって来ても、親父は一番後ろの遠い所で、気づかいながらこちらを見ていた。心の中でごめんなさいと叫びながらもとうとう声に出せなかった。初めての外泊は、４０数日の後であった。親父の前で正座し、心配かけて頭を下げて謝ろうとすると、親父はニコニコしながら、「今日は特別

ごちそうしてあっとばい。お前もじゃんじゃん食うて体力つければよかぞ。」ニコニコと箸を取った。そんな親父が、亡くなった。現場に駆けつけ、４５歳の息子の切れた腕をタオルで結んだ父。救急車に裸足で一緒に乗り込み、隊員に、「もっと急いで走らんね」怒鳴った親父。思っても、思っても心尽きない。その頃の私の作に、“優しさへのありがとうは、あなたのことをずっと思い続けることですね”とある。何度も何度もいただいたこの命。あなたに恥じないよう、ほかの人に喜んでもらえることをさせてもらいます。今も背中で、親父が私を見守ってくれている。このようなまえがきを、最近まだ作っているのですが、手を切ってよかったなというのがいっぱいありますね。手がついていれば、今頃、横着で傲慢な私があの辺をうろうろしていたであろうと思うのです。ただ一番、ニコニコと楽しくなったのは、そういうことに気づかせてくれた、なくなった手というのがあるのです。もう本当にほかの人は優しい。私は１１日から、飲まずに来ました。ちょっとここで水を飲ませてもらいます。今、講演会に行くとコップに水を入れて出してもらうように決めました。これはなぜかと言いますと、最初の頃はなかったのですが、子供たちが作文を書いてくれました。すると作文の中にこう書いてありました。“大野さんの話は面白かったけど、一番感動したのは大野さんがコップの中の水を飲んだことです”と書いてありまして、それ以来コップの水は飲まないといけないと思って飲んでいます。沼津から浜松に行って広島に１４日に帰ってきました。新幹線で移動しました。弁当を食べようと思って、駅弁を買いました。私は右側の２列の方に座って、３列の方に親子連れが座っていました。私は、何で食べるかと言いますと、割り箸で食べます。今日もギャラリー有田の久保さんのところで食べてきたのですが。割り箸をどうするかと言うと、真ん中に爪楊枝を落とします。そしてフォークにして食べるのです。食べていました。最後に、真ん中にグリンピースの甘いやつが５,６個残りました。私は甘いものは最後に食べようと残していました。ところが豆がなかなか割り箸の上に乗ってくれないのです。汽車は動くし、どうにもならないので食べなくてもいいかとふたをしていたら、横の上で声がしました。「あーあ」というのです。見ると、おそらく３歳、４歳の女の子だと思うのですが、横で私を見ていて、私がやめた途端に言ったのです。俺を見て応援しよった。これは絶対食べなくてはいけない。それで、もう一回あけて、割り箸から爪楊枝を引っこ抜いて集中して豆を１個刺した。せっかくなら２個刺そうと思い、２個刺して見せてパクッと食べますと、「やったー！」と言って応援してくれるのですね。私は涙を流しました。全然知らない人なのですが、皆あったかいなぁ。私みたいな全然知らない人を応援してくれる。そういうことばっかりです。今の子供はつまらないとか聞きながら、すごいなぁと思いました。つい先日も、大分の保育園にお話しに行きました。子供がぶぁーと集まってきました。「うわー、変わったおっちゃんが来た」と言って皆来て見事に囲んだのです。動けなくなったものですから、私は手を振っていますと、「おっちゃん、その手どうしたの？」と言うのです。私は説明しました。「あのね、お百姓さんやっててトラクターの事故で切れた」すると真ん中の子が、「痛かった？」と聞くのです。「痛かった」と答えると端っこの子が、

「おっちゃん、痛かったら今度からは切らない方がいいよ」とですね。そうそうその通り、やさしい、やさしいと思いましてうれしくなりました。せっかくならサービス精神で「ちょっと触ってみるね？」と言いまして。逃げていくと思ったのですが、ところが違うのです。「中から手が出てきた」「あかちゃんみたい」「お母さんのおっぱいみたい」皆でまたぶぁーと来て、６０人位いたでしょうか、片方の手で終わらなくなりましたのでこういうときに都合がいいのですね。こっちの手もあるぞと両方を皆でさわっておりました。私もニコニコしながらその辺でやめればいいのですが、いたずら心がちょっとでてきまして、担任の若い保育園の先生たちもいっぱいいらっしゃるのですが、私は先生たちにいいました。「あのね、あなたたちがさわるとやわらかいでしょう。でもね、担任の若い先生たちがさわると固くなっていくんだよ」子供は「股間でしょ」と言うもので先生たちも顔を赤くして喜んでおりました。こういうのをずっとやりながら旅をしてます。こどもはやさしいなぁと思い自分で足りないところをもらっているような気がします。

今、１日に３０枚ハガキを買っているのも決めて５年位になります。出会いがあった人にはハガキを書こう。最初は思いました。今は機械で皆やる時代だから、機械を稽古しようと思ったのですが、書いて出すととても喜んでくれる人がいらっしゃいまして。１枚書くのにも苦戦しました。でも３０枚書いても苦戦するなら多いほうがいいと思って、毎日それをやってきました。おかげで、早くなりました。大体2,3分あれば１枚終わります。私は筆不精というのは生まれつきと思い、言い訳ばかりしていました。素敵な人に会うと全然違うのです。皆やさしい人は筆まめなのです。私の美術館に掲げている額の中に、筆まめとは、やさしい人のことを言うのですね_というのがあるのですが、本当にそのような気がして、俺もやさしくならねばと思ってずっと書いています。今一番のうれしい時間です。人に喜んでもらうとうれしいというのをずっとこうしてやってきました。

今日は、青少年にかかわっている人が多いということで、そういう話をさせてもらいたいのですが、最初私は学校に行きました。手がなくなって、これで仕事はもう終わりと思いました。人の世話にはなるが、何の仕事もできない。ところが、病院を出るとき、この手で、人の中に堂々と入っていくぞと決めていたら、学校の先生が、「講演を頼みたいけどその手じゃ人前ははずかしいでしょう」と言われたものですから、用があるなら行くぞと学校に行ってそれからずっと学校をまわらせてもらいました。それでこういう旅をして講演会をやらせてもらっています。人間というのはすごいと思いのです。やろうと思えば何でもできる。私はそれまで４５歳だったのですが、今の子供は困らない。学校に行きだして思ったのですが、子供はすごい。よっぽど大人よりしゃんとしているのです。

今、ホームページをつくったのですが、yahooで大野勝彦で見られます。私もこの間、自分の名前で検索していると、こういうものがでてきました。〝第１４回感動作文コンクール優秀賞〟ですね。これは茨城の５年生が書いた私の詩を読んだ感想文でした。何も分かっていないのが５年生と思っていたのですが、この文章を見て感動しました。早速そこからコピーをして、この間、電話をして私はこの子に会いに行ってきました。５年生が書い

た文章を読んでみます。〝熊本県に住む大野さんは、家業に使っているトラクターを洗っているとき、機械に巻き込まれた。助けを求めたが、おばちゃんは機械の止め方を知らない。力いっぱい自分の体を引き抜いたとき、両手をもぎ取られてしまったそうだ。今は義手で生活していて、体験の講演をしたり、詩画集を出版したりしている。そこで見る絵はどんなつらいことがあったか想像できない。『神様からのメッセージ』を読んで私は泣いた。父も母も泣いた。それでも生きるんじゃ。それだから生きるんじゃ。死んだつもりでやらんかい。神様に大野さんが叱られている詩だ。私の父も仕事が農業なので、大野さんのようにトラクターに乗る。『一部を照らす人生』という本を読んで、父も同じようになったらどうしようと考えただけで震えがきた。父のケースで笑って話ができるだろうか。手をなくしてもお父さんはすごいと平気で友達に自慢できるだろうか。とても自信がない。父は、ごめんと一言書いて自殺してしまうかもしれないと言う。大野さんのように強く生きられないかもしれない。きっと父なら自分の将来に自信を持てないと思う。一輪のバラの花と一緒に、大野さんの奥さんはメッセージを送った。“手が必要なときは、私の両手を遠慮なくお使いください”母は同じところを何回も読んでから、私、そんなにやさしく言えるかなぁ？と言った。自分なら子供のこととか、これからのこととか先に考えてしまうかもしれないと教えてくれた。“隣りの花は赤く見える”これは、彼が教えてくれた諺だ。なんでもないものをねだっても仕方がない。努力をしてあるものを大きくしていかなければいけないという意味だそうだ。大野さんは手をなくしたおかげで、自分の周りのやさしさが分かった。自分の人生観が変わった。死んだつもりでぶつかっていけば、幸せが待っている。大野さんは両手をなくしたおかげで、人から人間になったのだと言う。人生は一回しかないのだから、逃げ出すことも、先延ばしすることもできない。大野さん自分に負けそうになったら、またこの詩を読みます。私も人に幸せをあげられるような人間になりたい。あなたの偉大さにふれたくて、やさしさに甘えたくて、たくさんの人が回りにいる。一言うんとうなづいてもらうだけで心が幸せになる。なんであなたはそんなに輝いているのですか？生きている伝記を読んだようです。感動をありがとう。〟こんな文章が出てきました。私は、無性に会いたくなりました。つい先日、会いに行ってきました。訪ねると頭でっかちのそういう子かと思っていたら、ニコニコしていました。行ったのは１２月だったのですが、迎えにやってきてくれました。やっぱり子供はすごいなぁと思いまして、本当に教えてもらうことが多いですね。

身の回りにこんなに素敵な人が、どんどん増えてきまして、自分の嫁が一番喜んでいるのです。手を切って、運が悪いと思っていたのが、運がいいと思えるようになったのはその辺のことが一番、要するに、あんな嫌な両親と思っていたのが、こんなに思ってくれている両親がいる。子供だって。友達だってこんなに。それで私はうれしくなってこうやって旅させてもらって。そうして思ったのは、俺は暇になったら、素敵な先生とか、素敵な人に会いに行こうと思っていたけど、それは間違いだった。よく考えてみると、相手を選ぶということを全然頭に入れていなかった。自分は素敵でないから素敵な人に会えない。

それならもっと素敵にならないと、会えないと思って、それ以来、言われたことは全部やるぞと思ってここまでやってきました。いろんなことをやりました。クラウンからCDも出しました。演歌歌手なんて昔なら絶対やっていませんね。よい経験させてもらいました。ぜひ皆さん聞いてください。『春よこい』と『ありがとう』です。大野勝彦と言えば、どこの店にもあるはずです。売ってないときには取り寄せてください。ただ私もいろいろとスケジュールがありまして、紅白だけは辞退しておきますと言っているのですが。

本当に素直なんですね。やります。やらせてください。元気ですということで、ずっとやってきました。何か言われたときは自分が言われたのだから、よし私でよかったらやらせてくださいと思ってずっとやってきました。色んなことやらせてもらいました。今日もここまで車で来ました。ここの信金の尾形さんには魚釣りにずっと連れていってもらっています。いろんなこともできないと思ったら、できないのです。作品にこういうのがあります。“できる、できる、できる。必ずできる。できないのは言い訳ばかりしている自分のせいだ。”できなかったときはできない理由をずっと考えていました。今思うには、「やろうと思う気持ちが足りなかったのだ」と。できなくても認めないと思っていまやっています。この前、個展会場に右手のないおばちゃんが来ました。義手はなかったのですが、ハンドバックで隠されておりました。私は、「その手を出したほうがいいのではないですか。ほんとに隠さにゃいかんのは顔ですよ」と言ってやりました。するとおばちゃんも「そうですね」と言ってこれからは手を出すとおっしゃっていました。

人に喜んでもらうのはうれしいというのが手を切ったことでよく分かった。これまでは自分がおいしいものを食べたり、自分がほめられることばかり考えていたのですが、なぜだか、今になって「お世話になります。」「ありがとうございます。」と言われるようになって本当にうれしかった。私が描いた絵をもらっていった人が、「ありがとうございます。」と言うと響きがいい「もう一回言ってくれませんか。」という思いになるのです。喜んでもらえることはうれしいと思い、それから自分にできることはなんでもやる。

気づきというのは、その人にとってちょうどいい信号なのですね。私には片一本の手が切れたくらいでは私にはこんな気づきはなかったと思います。でなければ、もうちょっと頑固になっていたと思います。私は、絵を描いて、言葉も書くのですが、“人は壁にぶつかると強くなると思っていた。でも私はぶつかるたびにやさしくなっていっているような気がする。それがうれしい。それがありがたい。”そのような言葉があります。うれしいですね。死ぬ目にあったから、開き直って俺には何も怖いものはないと言う人は、死んでもらうとシャバの中は楽しくていいのですが、そういうときこそ、やさしさにかえってくることがいいのではないかと思うのです。

“天命に生きる”と書いてもらっていますが、自分の仕事はなんだろうとか、これでいいのだろうかという生き方をずっとやってきました。おもしろくないなぁ、一生百姓してこうして生きていくのかと思っていました。今は完璧にこの仕事は俺に一番だと思い、こういう仕事をさせてもらっています。ありがたいことですね。出会いがないとこういうこと

もありません。ですから喜んでこの仕事をさせてもらっています。

時間がきましたので、最後にですね、講演会で全国を回りました。熊本弁では分からないと思いまして、標準語の稽古をしました。大体標準語を使えるようになったなと自信を持って回っておりました。4，5年前に千葉でしゃべっておりました。終わったら、おばちゃんが来て、「大野さん、熊本弁が懐かしかった」と言うのです。熊本のおばちゃんでした。それで私は、「すいません。せっかく熊本なら熊本弁でしゃべればよかったですね」と言ったら、「いやいや、最初から最後まで皆、熊本弁でしたよ」と言われました。あれ以来熊本弁でいこうと思って熊本弁でしゃべっているのですが、どうしても言葉だけに分からないところがあってはいけないと思いまして、最語に読む詩を作りました。それがさっき5年生の子が書いた、『神様からのメッセージ』です。ちょっとこれを読んで終わりにしますが、この詩の中の一箇所でも、どこか頭にいれて友達とか、うちに帰ったら両親とか、子供さんにこんな話があったとされてもらえれば、うれしいです。これは私が、神様から叱られている詩です。　神様からのメッセージ。それでも生きるんじゃ。それだから生きるんじゃ。何だ偉そうに「格好悪い。ああ人生はおしまいだ」なんて、一人前の口を叩くな。あのな、お前が手を切って悲劇の主人公みたいな顔してベッドで、うなっていた時なー、家族みんな、誰も一言も声が出なかったんだぞ。ご飯な、食卓に並べるのは並べるけど、箸をつける者はだぁれもいなかったんだぞ。これまで一度も、神様に手なんか合わせたことがない三人の子どもらナ、毎晩、じいさんと一緒に、正座して神棚に手を合わせたんだぞ。バカが、そんな気持ちも分からんと「なんも生きる夢がのうなった」「他の人がバカにする」そんなこと言うとるんだったら早よ、死ね。こちらがおことわりじゃ、お前のそんな顔見とうもナイワ。どっか行って、メソメソと遺書でも書いて、早よ、死ね。なー体が欠けたんじゃ。それでも生きるんじゃ。それだから生きるんじゃ。考えてみぃ、お前の両親いくつと思う。腰曲がって、少々ボケて、もう年なんや、一度くらい、こやつが、私の子供で良かった「ハイハイ、これは私達の自慢作です」って人前でいばらしてやらんかい。もう時間がなかぞ。両手を切って、手は宝物だった。持っているうちに、気づけば良かった。それに気づかんと、おしいことをした。それが分かったんだったら、腰の曲がった、親の後ろ姿をよー見てみぃ。親孝行せにゃー、お前が本気で思ったら、それは、両手を切ったお陰じゃないか……。今度の事故な、あの老いた二人には、こたえとるわぃ。親父な、無口な親父な、七キロもやせたんだぞ。「ありがとう」の一言も言うてみぃ。涙流して喜ぶぞ、それが出来て初めて人ってもんだ。子ども達に、お前これまで何してやった。作りっぱなし、自分の気持ちでドナリッパナシ、思うようにならんと子育てに失敗した、子育てに失敗した、あたり前じゃ、お前は子育ての前に自分づくりに失敗してるじゃなかか。あの三人は、いじらしいじゃないか。病室に入って来る時ニコニコしとったろが。お前は「子達は俺の痛みも分かっとらん」と俺にグチ、こぼしとった。本当はな、病室の前で、涙を拭いて「お父さんの前では楽しか話ばっかりするとよ」と、確認して三人で頭でうなずき合ってからドアを開けたんだぞ。学校へ行ってなー「俺の父さんは手を切って

もすごいんだぞ、何でも出来て、人前だって平気なんだぞ」仲間に自慢しているっていうぞ。その姿思ってみい。先に逝った手が泣いて喜ぶぞ。しゃんとせにゃ。男じゃなかか。よし、俺が見届けてやろう。お前が死ぬ時な、「よーやった。お父さんすばらしかった。父さんの子どもで良かった」子どもが一人でも口走ったら俺の負けじゃ。分かったか。どうせまた、言い訳ばかりしてブツブツ言うだろうが。かかってこんかい！歯をくいしばって、度胸を決めてぶつかってこんかい。死んだつもりでやらんかい。もう一遍言うぞ、大切な人の喜ぶことをするのが人生ぞ。時間がなかぞ……。時間がなかぞ……。ちょうど時間なのですが、70分間こういう話をさせてもらったのですが、私は考えようによってはもうちょっと早く手を切っていたほうが楽しかったとも思えますし、私の周囲の人たちも幸せに近かったような気がします。考え方を変えれば、平成元年7月22日に手を切るのは昔からの約束事で、今日ここで私がしゃべっているのも決まりごとと思いまして今だけを精一杯生きようと思っています。明日まで皆さん研修会ということで、皆さんニコニコをつかんで帰っていただければいいなと思います。最後にですね、字を書かせてもらって終わりにしようと思います。

最初に中学校に行きました。それまでしゃべったこともないものですから子供たちに何か伝えようと思いまして、家族のぬくもりとか、やさしさというのを一生懸命しゃべりながら舞台の上で同じことを書きました。それから何千回も字を書いても今でもこう思っています。“幸せは気づいたときから始まる。本当は幸せなんだけどさよならの後に気づくのです”と書きました。今気づいてわたしたちはもっとニコニコして生きていくべきじゃないかと思っているのです。そんな気がしてなりません。それがなんだか出会った人への笑顔、ありがとうじゃないかなという気がしてこういう話をさせてもらいました。今まで聞いてもらいましてこれで終わります。どうもありがとうございました。

なんのために
生きている
そんな
難しいことは
分らない
ただ
好きな人
の
喜ぶ
そうなことを
考えるのみな

味の
ある
奴だ
みを
ガラガラとか
言いおった

やっぱ
いっしょが
ええ
なあ

大野勝彦「詩画集」より

グループディスカッション

テーマ「21世紀をどう生きるか」（グループNo.奇数）

グループ　NO. 1	
三　隅　英　人	唐津西
古　川　義　章	唐津中央
鹿　毛　理　恵	佐賀南
大　谷　容　正	多久
手　塚　貴　子	有田
吉　田　浩　史	武雄
渕　野　達　弘	鹿島
モハマド・サルワル・アラム	佐世保西
田　崎　麻　美	大村
安　部　紀　孝	島原
與　賀　田　誠	長崎西
山　口　真　耶	大町
荒　木　純　弘	長崎東

グループ　NO. 3	
松　本　孝　行	唐津
平　田　優　子	唐津東
萩　原　亜矢子	佐賀大和
志　水　章　弘	有田
大古場　崇　幸	嬉野
中　島　理　恵	佐世保北
馬　場　栄　喜	諫早
レルーヴァン	長崎
川　満　隆　純	長崎西
野　口　義　之	長崎中央
イワヤン・スディアナ	東長崎
山　代　一　寛	長崎東
森　永　舞　子	鹿島

グループ　NO. 5	
加　世　堂　敦	唐津
Kees DE RAAF	佐賀南
冨　永　健　治	多久
山　崎　英　哉	有田
井　上　浩　樹	鹿島
野　中　さゆり	大村
金　子　公　隆	長崎
山　本　綾　子	長崎南
岩　永　信　司	長崎西
吉　野　茂　典	長崎西
荒　木　千　里	長崎西
ウェレン・クリストファー	佐世保南
Anita Poultney	諫早多良見

グループ　NO. 7	
緒　方　哲　哉	唐津東
坂　口　　正	伊万里西
藤　田　　亮	唐津中央
嬉　野　静　香	佐賀
鄭　　雅　方	佐賀南
瀬戸口　貴　子	佐賀大和
富　永　泰　弘	佐世保北
峯　　眞　一	長崎西
今　畠　由香利	長崎出島
小野原　聡　子	大町
大　神　吉　史	佐世保
イルファン・ロンドヌーブ	長崎北東

グループ　NO. 9	
戸　川　健　士	唐津
松　本　美　恵	唐津東
永　田　　誠	佐賀西
久　原　和　也	小城
奥　山　久　夫	有田
ウ　ル　ビ　ィ	太良
山　口　　剛	鹿島
中　村　　豊	松浦
松　永　ル　ミ	島原
タヌアート・ウィリアム・アリフ	長崎北
谷　山　洋　平	長崎西
藤　　幸一郎	長崎東
ハユ・サカクティニング・アディ	伊万里西

グループ　NO. 1

グループ　NO. 9

グループディスカッション

テーマ「男の生き方・女の生き方」（グループNo.偶数）

グループ　NO. 2	
古賀　英輝	唐津
山口　香	伊万里西
石丸　真琴	佐賀西
宮原　章彦	神埼
桑原　賢太郎	鹿島
大保　徹	松浦
周　牧音	佐世保北
Virada Prabharasuth	諫早
マイケル・カトラー	長崎西
中村　英輔	長崎西
野村　那津子	長崎北東
網　飛鳥	大村

グループ　NO. 4	
吉田　真綾	伊万里
古家　隆弘	唐津西
ルシール・ドウビッシャー	佐賀
小副川　博樹	佐賀南
馬場　千尋	有田
鄭　聲愛	佐世保西
吉牟田　研二郎	佐世保中央
永川　美和	諫早
登立　裕貴	長崎西
三浦　雄三	長崎西
箕内　浩介	長崎出島
山口　由香	大町
有森　俊太郎	長崎西

グループ　NO. 6	
山口　綾	伊万里
多比良　剛	唐津西
白津　幸哉	唐津中央
副島　大輔	佐賀西
山口　真吾	有田
山口　祐美子	武雄
光田　淳	松浦
橋口　洋介	諫早
戸村　大助	長崎
山口　隆一	長崎西
呉　韜	長崎中央
山下　勝利	長崎東

グループ　NO. 8	
大野　史保子	伊万里
岩永　弘志	伊万里西
藤原　幸司	佐賀南
上野　綾花	佐賀大和
今泉　知子	多久
Matthew Huster	武雄
古賀　竜介	鹿島
指山　立	佐世保中央
増田　愛子	大村
原口　忠浩	長崎
川端　俊介	長崎
梅田　雄一	長崎西
東　千代	諫早多良見
水崎　和幸	佐賀

グループ　NO. 10	
門　田　　豪	唐津東
古　賀　元　樹	佐賀
田　中　伸　明	小城
宮　原　研　一	神埼
ラ　フ　ァ　エ　ル	有田
大　島　ルミ子	鹿島
田　中　長一郎	佐世保東
中　村　聡　美	大村
山　口　昌　子	諫早
山　口　一　昭	長崎西
宮　村　　充	長崎出島
浜　口　達　成	唐津中央
松　野　ひろみ	長崎東

グループ　NO. 6

グループ　NO. 10

グループNo.１：「２１世紀をどう生きるか」

キーワード

「目標」 ・目標は、周りの環境に変化されることがある。

「経済」 ・２１世紀は自分自身に責任を負わなければならない時代である。
チャンスもあるがリスクもある。
目標を持って自分自身を確立しなければならない。

「教育」 ・ケアリング（癒し、癒されの関係）
・たくさんの経験　　例　国際交流　　福祉教育

要するに！！

これまで、話し合った内容をまとめると、開講式のときに歌ったローターリーソングである、「奉仕の理想」に集約される！！

グループNo.２：「男の生き方・女の生き方」

それぞれの国の現状

ブラジル：留学したときに、「日本では未だに女は男の後ろを歩くのか」と聞かれた。
未だにそういうイメージがある。
台　　湾：昔は日本と同じ考え方だった。今は平等である。
タ　　イ：昔は日本と同じ考え方だった。今は平等である。
アメリカ：昔は日本と同じ考え方だった。今は平等である。
今では、逆に父が家に入り母が外に仕事に出ることが多い。

グループNo.２の意見

男性の考え
・ 男性は基本的に家庭を守るために働く。
・女性は子供のために家庭を守る。
・子供からすれば家に帰ってきたときに母がいるほうが安心するはずである。

女性の考え
・女性は男性と一緒に家庭を守るべき。
・親しみがほしい。
・夫婦別姓がどうして存在しないのか。台湾ではあたりまえである。夫の姓を名のるのが慣習化しているのはおかしいのではないのか。結婚することで、自分の姓を捨てたくない。

グループNo.２の結論

性別にこだわることなく、男性も女性も自分の納得のゆく生き方をするのが望ましい。現在、そしてこれからの社会において男尊女卑といった考え方は通用しない。ただ生き方において男女の違いをつけるとすれば出産の有無など肉体的な観点からしか区別をつけられない。

グループNo.３：「２１世紀をどう生きるか」

２１世紀と言えば？
- 社　　会
- 教　　育
- Ｉ　　Ｔ
- ロボット
- 環　　境　→掘り下げて

自然環境

＜２０世紀までの問題点＞　　＜２１世紀はどうするか＞

- 自動車排ガス問題
  - マイカー通勤を減らす
  - 法律規制
- 自然破壊
  - 森林伐採を減らす
  - 材料のリサイクル
  - ゴルフ場の乱開発を減らす
  - 割箸の利用率減らす
- 公共事業
  目的がない、意味不明な道路（林道）や施設をつくらない
- 海岸・護岸工事が自然と一体化していない
- 公共事業（外観、自然と一体化）、リサイクル化、代替材料
  不必要な漁港施設を造らない
  干拓（目的、意味不明）必要以上に行わない
- ゴミ問題（家庭用ゴミ、産業廃棄物）
  リサイクル推進
- 地球の温暖化
- 日本のCo^2排出量の目標値の設定を下げる
- エアコンを必要以上に使用しない（節約）
- 地球温暖化に繋がる行為をみんなに周知
- 車を全てハイブリットカーにする（メーカー、ローコスト開発）

総評
自己意識の改革（自然に対して知識を得、実行に移す）

グループNo.４：『男の生き方・女の生き方』

§個人の意見（イメージ）
- 「男が働き女は家を守る」というイメージがある。
- できれば共働きがいい。
- 嫁や家族を養うのは男だ！　　etc

§今から日本で生きていく上での男女の生き方、全世界での男女のあり方について考える。
- 寿退社が夢、だけど現実的には無理。
- 家庭でも平等な家事・育児
- 主夫もあっていいと思う。
- 子供の為に施す時間が多くて自分の時間がない。
- 親だけでなく、子供も家事をする。

§社会的な考え
- 結婚するまでは男女同じ事ができるのに、結婚によって世間での考え方が変わる。
- 出産 ＝ 子育て → 女性の役割
- 子供が大きくなったら男性も育児を
- 男女別の考え方を“人間”という基準に変える。
- 日本が男性社会になっている。

§社会をどう変えていくのか？
- セクハラ‥女性が弱いという前提での言葉
- 男女平等‥実際にはできていない。
  公務員や大企業のみ実施される男女平等。

・個人個人の生き方・考え方を語れるような社会を！
・自分の生きたいように生きる。

§なぜ平等である必要があるのか？

・男女ではなく個人の実力を重視すべきだ
・女性の力が軽視される（正しく評価されていない）
　同じ機会・同じ評価を
・年輩の人は男女の役割の固定観念が強いから。

＊結論＊

各個人が望むように生きればいい。

グループNo.５：21世紀をどう生きるか

・学校生活で楽しむためには、明るく、笑顔を作る。（皆でいっしょに）
・一人一人が個性を出していく。自分の得意分野で力を身につけていく。
・１０年後、２０年後、５０年後を考えたとき、とても不安な要素が多い。
　一人よりも皆で力を合わせて協力していく事が大事。
・自分のやりたい将来のために今は、その土台作りをしている。自分にはやりたい事があるので、まだ将来はその夢にむけて生きて行く事しか見えていない。
・人が楽しんで生きていく為の最低条件として他人に迷惑をかけない。
・今の現実は、厳しい。仕事は落ち込むが、内容は段々ハードになっていく。

全体的に未来を見たときに暗く厳しいイメージがほとんど

・自分が、思っていた事と現実があまりにも違っていた時にものすごいショックを受けた。
・最終的には、お金があったほうが有利。
・自分の目標に向かって努力する。
・最初は、色々な理想があったが、実際に社会に出ると現実とのギャップがある。
・今は、昔と違って雇用状況も厳しく・なりたい・入りたい所からの求人もなくスタート時点ですでに不利（ハンデキャップ）がある。
・今後は、皆と同じ職業や、誰もが考えつく職業より特殊技術を身につけたり、今はまだ誰も手をつけていないものを見つけたり、アイデア勝負だったり、誰かと同じでは、うまくいかない。

最終的には、笑顔で生活するために自分のやりたいことや目標に向かって一生懸命に努力し生きていきたい。

グループNo.６：「男の生き方、女の生き方」

○ 今と昔の生き方の違い

昔は男→仕事　女→家庭
皆の生き方が受動的では
世間の生き方しかないと思わされてる
道路工事のショベルは男、
つまり
男と女の力は歴然
昔の流れを引き継ぎながら平等
生活の方法

○ 具体的な考え方の違い

環境や経験で考え方で考え方が違うのであって
性別で考えが違うのではない
↓
性別が違うから基本が違う。
それでも女性の板前などがいない、
それはイメージで決まる。
↓
払拭は難しい。
↓
最後は個々の問題である。

○意識の改革が必要。ただ話し合っていても何もならない。

変わってきている例として男女機会均等法が
あるが形だけで実際は変わってない。
↓
改革が必要。
メンタルなところはどうやって変わるか。

○自分は今後どう生きたいか

簡単に男としてどう生きたいか
私は男は仕事をしてあたりまえ、女はやっぱり
うちでという考え方がまだある。

まとめ

男はどうあるべきだ、女はどうあるべきだと言う考えは昔、今は無くなる方向だが、しばらくはなくならない。
今後、漠然と生きていくのではなく、各人の目標なりをもって生きていく

グループNo.７：「21世紀をどう生きるか」

～問題点～

★少子高齢化社会
（子供が少ないよぉ～！周りは・・・
じーちゃん・ばーちゃんばっか！）

★資源・環境・ごみ
（いつまでも！あると思うな・・・
地球と親と金！！！）

★雇用制度改革！
（年功序列は・・・・もう終わり！！！）

★人間関係
（隣の人は・・・地球人？）

現　状・・・

★少子高齢化社会
★資源・環境・ごみ
★雇用制度改革！
★人間関係

自分達の１番の問題点は？

ご　み！

～解決策～

★排出物はリサイクルへ・・・
（循環型社会の形成）

★ごみを最低限出さない
（無駄を省く）

★企業も消費者もできることを確実にやる
（身近なところから一つ一つ）

グループNo.８：「男の生き方、女の生き方」

これからどう生きるか

これから人間的魅力を磨いていきたい。
知識を増やし、自分が会社で必要不可欠な存在になりたい。
子供がもっと大きくなったら、仕事でレベルアップをはかりたい。
自分が人間的にもっと成長してから、子供を持ちたい。
結婚して、子供持ち、子供とともに自分も成長したい。
仕事もできて人間的にも魅力のある人でありたい。

自分の理想像

男女とも仕事ができ、人間的魅力を兼ね備えた人
同性に好かれる人
目的を持って一生懸命行動する
自分の発言に責任を持つ
仕事と家庭の両立
知識の豊富な人
仕事に目標、熱意、責任
転職し、知識は増えたが、いつか自営業の夢を持っている
介護福祉士になり、人の役にたちたい。
日本と自国の交流をはかり、流通関係の仕事をしたい。
頼れる人
目的・目標を持った人になりたい。

結婚しても女性は仕事を続けるか

これからの女性は結婚しても働いていてほしい。
社会的な刺激を受けて魅力的であり続けられる。
相手が望むようにする。
家庭での役割分担はどうか
女が外で働いて、男が家で家事に専念することに対して、自分自身は何ら抵抗はない。
自分は仕事したいが、男が家事に専念することには抵抗がある。
それなら、自分が仕事をやめて家庭に入るほうがいい。
女性は自分も仕事をし、家事も分担してやっていきたい。
固定観念にとらわれず、相手の意見を尊重すべきである。

まとめ

目標を持って一生懸命何事にも取り組み、仕事も家庭も両方大事にする。
今は男性も女性も生き方にはそれほど違いがない。

グループNo.９：「21世紀をどう生きるか」

２１世紀の問題

○戦後の高度経済成長を経て日本は物理的に豊かになったがそれと引き換えに心の豊かさを失いつつある。
○ワープロやパソコンの普及により字を書かなくなった。
○テレビなどの普及によって、特に若い世代は昔ながらの方言または言葉を使わなくなった。
○都会に働きに出ることで地方の過疎化が進んでいる。
○若者の地元意識が薄れ古きよき文化が失われつつある。
○限られた資源に頼りすぎている。

この問題は日本だけでなく経済成長を続けているアジア各国にも言えることであり２１世紀に生きる私たちに課せられた重要な問題である。

そこで私たちの出したひとつの生き方が

温故知新

「温故知新」とは
昔のことを尋ね求めて、そこから新しい見解知識を得ること。

古いものを残しつつ、新しいものを取り入れ発展させる。

「温故知新」実践の例

☆限られた資源（石油や石炭など）だけではなく、風力や水力・原子力などの新しい資源をバランス

よく活用する。
☆心の豊かさを取り戻すために言葉の文化を残したい
☆ワープロ・パソコンを利用しながら、自筆も共有させる。

☆次世代に伝統を残す
　松浦一くんちの流鏑馬
　唐津一くんち
　鹿島一ガタリンピック
　各地方の精霊流し
　インドネシア一民族衣装

☆戦争・天災の恐ろしさを次世代に伝える
　長崎原爆の恐怖
　長崎大水害
　島原普賢岳の災害

まとめ

巷では暗い話題ばかりが飛び交い、その中で明るい未来を見据えて生きることはとても難しいことです。しかし２１世紀を担う私たちが今の状況を変えていかなければなりません。私たちが提案した「温故知新」は世界中の誰もが持つべき教訓であり、２１世紀をより良くするための大切なキーワードだと考えます。まずは、自分の住み慣れた街から何かを変えてみませんか？

グループNo.10：「男の生き方・女の生き方」

一人一人の意見

昔は女の人が家事、男が働いていたけど今はそんなのが、なくなってきている。(10代・男性)
社会に出たとき、女性がはっきり物を言う時代になってきた、女性が力を出せる時代になってきた。(10代・男性)
男には男の、女には女の良さがあり、特性があり、その特性を生かしあってこそ、本当の男女共生ができる。(20代・男性)
社会生活の大元は家庭、やはり女性には家庭に入ってほしいが、女性の社会進出はいけないとはいえない。(20代・男性)
仕事で出世する事だけが男の生き方ではない。(20代・男性)
理想は、男は会社人間として、バリバリ働き女性は家事をしてもらいたい。(20代・男性)
男の人には、引っ張っていってほしい。でも自分の事は自分で出来る女になりたい（10代・女性）
その人にあった生き方をすればいい（20代・女性）
男の人にも、家事を手伝ってほしい（10代・女性）
男の生き方はこうだ、女の生き方はこうだと決め付けずに、自分のやりたい事をやれる社会になってほしい（10代・女性）
理想
男→仕事ばかりではなく、バカであってほしい夢を追いかけてほしい
女→そんな男性を支えてくれる。家庭に入ってる女性、大きな心で見守ってくれる人（20代・男性）

アメリカでは

女性は結婚しても仕事を続けている。子供が産まれても仕事を続けるのが普通。(アメリカ人・10代・男性)

自由奔放な人とキチッとしている人では、どっちがいいか？

高校生：自由奔放な人。
社会人：昔はそう思ってた。
自分が見て、あの人の様みたいに生きていきたいと思う人。
自分が知っている、汚れを知らない大人

結　論

人の生き方には、答えはないなぜなら一人一人考え方が違い、自分の生き方を強制する事は出来ない自分の生き方を強制すればその人の「人権を無視」をしてしまうからだ。
そこで出た答えは、一人一人が、「あの人の様な生き方をしたい」と思う人を、各自見つけその人の生き方をその人から「人生哲学」を学び、生きて行けば自分にあった生き方ができる。
少なくとも我が班の人間は人の生き方について強制はしない。
自分の尊敬する人を見つけ、その人の様に生きて行き、また次世代の者に尊敬される様な、生き方をしていく。

ＲＹＬＡに参加して

第２３回ＲＹＬＡに参加して　　大町ＲＣ　　山口由香

私は、「ロータリー」がどういう団体で、どういう活動をしているのか全く知らずに、今回のＲＹＬＡプログラムに参加しました。

もちろん、全世界でロータリーが活動をしていることも今回の研修で初めて知りました。私は会社の同期３人と参加したのですが、部屋はおろか班も３人バラバラで正直戸惑いました。班にも部屋にも留学生がいて、どう接していいのか、どう話しかけたらいいのか分からず、結局挨拶を交わす程度しかできませんでした。また、同じ班の高校生も自分の意思や考えをはっきり持っていて、ディスカッションの場でも、すらすらと自分の意見を言っていて驚きました。高校生の中には留学経験者がいたり、留学希望者がいたりして、自らの経験談や希望の動機など聞き、圧倒されるばかりで、私の高校時代とは比べ物にならない程しっかりとたくましく思いました。

また、ガバナーと大野勝彦さんの話は、すごく心に残っています。おふたりとも、忘れたくても忘れられない過去なんだと思います。でも、それを乗り越えて話をされるまでには、想像できない程の苦労や努力をされたんだろうなあと思うと、お二方から直接話を聞けて良かったなと思います。今回のＲＹＬＡプログラム、初めは戸惑いもあり、環境（考え方）の違いに私が参加してよかったのかと思いましたが、多くの方と接し、その人の考え方生き方に触れる事ができ、私自身の勉強にもなりました。

今回の研修に参加して良かったと思います。この経験を、今後の私生活や仕事に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

第２３回ＲＹＬＡに参加して　　大町ＲＣ　　小野原聡子

３月１６・１７日の２日間は生きることについて考えるよい機会となり、充実した時間だったと思います。

講師の大野氏は両腕が義手であることを知り、まず考えたのはもし自分が同じようになったら、ということでした。これまで当たり前と思っていたあらゆることを思うままにできない不自由さやもどかしさに耐えきれるだろうか、周りの人の優しさを素直に受け入れられるだろうか、など考えればきりがなく、後ろ向きな自分の姿ばかりが浮かび、はじめは同情でしか見れないという思いしかありませんでした。しかし、大野氏の生きることに対する前向きな強い思いを知り、その姿を目の前にして、同情などという気持ちを少しでも抱いたことを恥ずかしく思い、またそれ以上に、毎日をなんとなく生きている自分を情けなく感じずにはいられませんでした。この講演は、大野氏のまぶしいほどに輝いた人間らしい姿と、たくさんの詩に込められた思い、メッセージに心を打たれ、自分の今の姿を考えさせられると同時に、生きることはこんなにも素晴らしいものなのだと教えられた時

間でした。大野氏の最後の力強い実演は、思わず涌いてくる涙をこらえるのが精一杯でした。

今回のメインであるグループ別ディスカッションは、これまで経験したことがないような白熱した討論を目の当りにし、雰囲気に押されそうなほどでした。

テーマ：２１世紀をどう生きるかについては、自分なりに漠然と考えていましたが、一人一人考え方は違っており、一つのことについてさまざまな角度から多くの考えを聞くことができました。しかし、夢や目標を持って生きようということは共通だったように思います。ただ、言葉にするのは簡単だけれど、その夢や目標に向かって努力をしなければただの憧れにすぎないということは肝に銘じておかなければならないと思います。今の自分は毎日を何となく過ごしているなと思い知ったこともあり、「２１世紀をどう生きるか」というテーマは自分へ課すべき課題そのものだったと思います。実際の討論では周りの人たちに圧倒されるばかりでしたが、大きなテーマについて浅くとも自分なりに考える機会を持ち、いろいろな考えを聞くことができ、貴重な経験となりました。

ＲＹＬＡプログラムに参加して　　大町ＲＣ　　山口真耶

私がこのプログラムに参加したきっかけは、上司からの「参加してくれないか」の言葉を受けてだった。日程が、会社の休みの土・日でもあったし、自分から望んで参加を決めたわけではないので、仕方なくという思いであった。

予定してあったプログラム内容も、私にとってとても意味深いものだったと思う。

少々ハードではあったが、終了したときは充実感でいっぱいだった。心から参加してよかったと思った。これからも、人との出会い、交流を大切にしていきたいと思う。

“ＲＹＬＡ”に参加して　　松浦ＲＣ　　中村　豊

考えてみると、高校を卒業して以来ほとんど団体行動をとったことがない。ましてや国歌を斉唱したり、大勢で食事をとり、一緒に寝泊りすることなどこれから先の人生でもそうはないはずだ。ＲＹＬＡに参加することは、僕にとってそういった経験を積めるだけでも十分に価値あるものだった。しかし、貴重な経験はもちろんそれだけではない。

「天命に生きる」というテーマで始まった大野勝彦氏の講演は、家族や友達の大切さ、命の尊さを改めて考えさせるものだった。僕には事故で生死をさまよった経験を持つ親友がいるが、生きる気力を失った彼を支え、共に窮地を乗り切ることで、お互い多くのことを学んだし、二人の信頼関係は絶大なものになった。そういう自分の体験談が大野氏の話とダブり、目頭が熱くなった。今、自分が何不自由なく生きていける境遇を大事にしていきたい。そして、さまざまな人に支えられて初めて我が命を全うできることを、僕らは肝に銘じておかなければならないと思う。

僕にとって、ＲＹＬＡでの一番の収穫は、やはりいろんな人との出逢いではないだろうか。先に述べた大野氏もそうだが、セミナーに参加した同世代の人たちと知り合えたことは、自分の視野を広げるいい機会になったと思う。特にグループディスカッションの仲間

とは、夜中までテーマについて話し合い、発表文完成を目指して一致団結することができたし、親睦も深めることができた。そして、そのおかげで最も個性的な発表をすることが出来たと確信している。この達成感はおそらく他のグループでは味わえなかったのではないだろうか。それほどグループＮＯ．９の仲間は僕にとって特別なモノになっていた。願わくば、ＲＹＬＡを離れたこれからも連絡を取り合い、今度は真の友人としてよりよい関係を築いていきたい。

最後になったが、僕は今回“ＲＹＬＡ”に参加して、本当によかったと思っている。だから、このセミナーに参加を勧めてくれた母や、僕らのお世話をしてくださったロータリアンの方々に、心から感謝したい。

『ライラ』に参加して　　諫早ＲＡＣ　　山口昌子

２００２年、３月１６日・１７日に開かれたライラに初めて参加した。“生きる”ということをテーマに記念講演やディスカッションに参加した。記念講演では、大野勝彦氏による“天命に生きる”というテーマで講演された。大野さんという方は農作業中に機械に手をはさみ、両手を切断された方だった。大野さんは幸せだと思う。両手を切断するということは考えもしないことだし、どちらかといえば、なくしたくない。でも大野さんは、両手をなくすという経験をされることで、学ばれ、改めて“生きる”という喜びを実感されたのだ。私たちは何かにしろ経験する。その経験を全て失敗とは思わず、学びと考え、身につけていければいいなあと思う。続いて、マグカップの絵付けを行った。私としては上出来のマグカップになりそうだ。それにプラスして大野さんの言葉が添えられるとなるとますます出来上がりが楽しみだ。

夕食後、まだまだゆっくりされず、今度は、ディスカッションを行った。私が参加したテーマは『男の生き方、女の生き方』というグループだった。最初にこのテーマを見た時、各個人、自由に生きればいいのでは?ディスカッションする必要があるのだろうかと思った。でも、各個人、考え方も違うしいろんな考え方を持っていると思った。私自身としては、“生きる”＝どう生きたいかと考え、目標を持つようにしている。無目標というのは、今と変わらないし、成長できないと思う。何がやりたいか、何が欲しいか、どう変わりたいのかなど目標にして、できれば書いて目標達成の日程も添えればカンペキであろう。でも実際のところ難しいが、可能性は十分あると思うし、達成に向かっていくことにより、経験もし、学び、身につき、成長し、目標達成すれば、生きるということが楽しいであろうと思う。いずれにしろ、幸せに生きたい。

２日間で一番楽しかったことは、留学生と一緒に指スマゲームを行ったことだ。あのオーバーリアクションはぜひ真似したい。ライラの良いところは、いろんな人と出会えることですね。

参加できたことに感謝します。ありがとうございました。

セミナー研修についての感想　　長崎西ＲＣ　　中村英輔

自分は今回、初めてＲＣが主催する『ロータリー青少年指導者養成セミナー』に参加させてもらいました。まず、体育館で開講式がありました。その後に休憩をはさんで、画家の大野勝彦先生に『天命に生きる』というテーマの講話をしてもらいました。大野勝彦先生は、平成元年７月２２日に機械により両手を切断したそうです。それまで『自分には運がない』『周囲の人達にも恵まれない』と思っていたのが、周囲の人達の優しさに気付き、自分が間違っていたと思ったそうです。それからは毎日のように字を書く練習をしたそうです。自分が大野先生の講話を聞いて感じたことは、大野先生はとても明るく芯の強い人だと思いました。そう思った理由は、両手を切断しても、自分らしく生きようとする大野先生の気持ちが感じられたからです。もし自分や自分の家族・友達がそういう事になった時に、大野先生と同じようにできるのか？と考えました。自分にとって、とても考えさせられる講話になりました。

グループディスカッションでは『２１世紀をどう生きるか』『男の生き方・女の生き方』というテーマで話し合いました。自分のグループは『男の生き方・女の生き方』というテーマでした。自分のグループでは、男性と女性の考えや意見が違っていました。男性の方は家庭に入ってもらいたいという意見が多かったです。女性の方は、家事などを手伝ってもらいたいし仕事をしたいという意見が多かったです。自分は、今の世の中は家事は女性だけでなく男性もやるべきだと思うし、女性もどんどん社会に出て行くべきだと思いました。自分のグループでは、男性と女性の考えは違っていましたが、目標を持って生きていく点では同じだなあと思いました。このグループディスカッションで話し合ってから、グループの人達とも仲良くなれたのでとても楽しかったです。

自分はこの研修でたくさんのことを学びました。その中でも、目標や目的を持って何事にも取り組んでいくことの大切さを学びました。自分にとって、とてもイイ経験になりました。

ロータリー青少年指導者養成セミナー　　唐津ＲＣ　　松本孝行

黒髪少年自然の家に着いて、参加者の多さに驚き、参加者の大半が若い人達ばかりで、みんなの輪の中に打ち解けれるか、心配でした。しかし、みんなと一緒に行動をともにしていくうちに信頼感が生まれてきたような気がしました。また、グループディスカッションでは、私が司会を勤め、テーマである『２１世紀をどう生きるか』について話し合うことで一つのチームになったような気がします。このセミナーで学んだことは、これから生きていく上で一番大切（信頼、団結力、一生懸命生きる事）な事を得たように思えます。今後もこの２日間の団体生活で学んだことを仕事、プライベートに活かして行きたいと思います。

ＲＹＬＡに参加して　　佐世保北ＲＣ　富永泰弘

大野勝彦氏の講演では、経験した人間でしか解らない苦しみ、その周りを囲む人間模様が想像できた。私も一度、学生時代にバレーボールの練習中、半月板を切断し入院した経験がある。自分では満足に歩けず、無力感を感じた。それまで、勝気の気性であったが、入院によって今まで気づかなかった点に気づくなど、考え方に巾が持てるようになった。大野氏の状況とは比べものにはならないがいい経験をした。

今回の講話では、あたりまえのあたりまえに生きている幸せを再認識させられた。そのことに感謝しながら、日々生活をしたいと思う。

２日間に渡り行われたグループディスカッションでは、職場等全く違う人間同士が１つのテーマについて討論できたのは、よかったと思う。私たちのグループは、『２１世紀をどう生きるか』という大きな題目であった。その中で環境問題を中心に議論を行った。各人がそれぞれ、それなりの知識を持っているが実行に移されていないのが現状で、買い物かごを持ってビニール袋を使わない、割り箸を使わない等、実際に行動に移すことが必要だとの結論になった。

今回、ＲＹＬＡに参加して、日常の仕事、生活に忙殺され忘れかけていた事、気付いていなかったことを確認でき、よかったと思う。

最後に、このような機会を与えてくださったことに感謝し、他の若い人にも是非参加して欲しいと思います。

ＲＹＬＡ研修　　有田ＲＣ　　山口真吾

この研修を受けたきっかけは、高校の先生から「行ってみないか」の一言だった。

その時は行くか迷ったが、友達との相談で行くのをやめようと思っていた、が、その事を先生に伝えるのを忘れてしまっていたら、勝手に登録されていた。

でもいい経験になるかなと思った。

そんなこんなで、研修の当日の朝、学校の先生から１本の電話が僕の家にかかってきた。そして突然、「君一人で行くようになった」と、聞いてびっくりした。僕一人で心細いと思いながらも仕方ないなと思った。

またしばらくすると、携帯にメールがきた。その内容は、別の学校の友達からで、「制服やろ、今日？」と来た。僕は「えっ！来るの？」と思って、メールを返すと「行く」と来たので、やった！と思った。

そして研修に行ってみると、本当に友達が来ていたので「ほっ」とした。開会式が終わり、講演を聞いて感動した。話の中に笑える所もあって楽しく聞けた。その後、行事が進んでいって、グループディスカッションが来ると答え切れるかどうかでドキドキした。はじめは、シーンとしていたけど、まとめてくれた男の人がいてくれて助かった。それも終わり、食事も終わり、部屋へ戻ると誰もいなかった。ルームメイトと仲良くできるか心配したが、ルームメイトと仲良くできた。そして夜遅くまで台湾の人や、日本の方々と話を

した。とても楽しかった。友達にもなれた。

次の日は、とても眠かった。次々と行事が終わり、全てが終ると、また会おうと言葉を交わしながらそれぞれ散っていった。この研修で得たものは、知っている人が少なくてもその気持ちになれば、自然と人が寄って来てくれるものだと分かった。先日の先生の無承諾がなかったら、たくさんの人々と出会わなかっただろう。これは大野勝彦さんが言った「人生は賭けだ！！」のことに当てはまると思った。本当に楽しかった。また機会があったら是非参加したいです。

感想　　佐賀西ＲＣ　　副島大輔

ロータリー青少年指導者養成セミナーに初めてインターアクト部として参加して、正直なとこ話はきついと思っていましたが、講師の大野勝彦さんの話はとても感動しました。大野さんは農作業の機械で両手をなくしてからの生き方を語ってくれて、人は変われるんだと思いました。大野さんが自分の意志で両手を切断すると決めた時はたぶん人生の中で一番勇気のいる事だと思ったし、口では表現できないほどつらい選択だったと思う。でも生きるためのとっさの判断だったと思うし、もし自分だったら自分の意志で両手を切断することはできないだろう。助けを求めつづけると思う。想像するだけで体が震えるほど恐いです。でもつらかったのは勝彦さんだけでなくて家族もつらかったと思います。つらいだけの言葉だけじゃなかったでしょう。エンジンを止められなかった奥さんには後悔、子供達には不安など沢山あったと思います。もし自分の家族が不幸にあったらと思うと生活は厳しくなると思うし、今までとは同じ生活はできない状況になると思います。何よりも心に大きな傷がつくと思ったし、その傷が全て消えることはないし背負って生きていかなければならないと思いました。勝彦さんは手を失って周りの人のやさしさや思いやり、いろんなことに気付かされたんだと知ったし、それを教えてくれたのは失った両手だと思いました。子供は立派だと思いました。勝彦さんは沢山の人に支えられて生きていると思いました。人は一人では生きていけないことを実感しました。勝彦さんが書いた文字や絵は一枚一枚気持ちが伝わってくるものでした。自分は今まで両手はあってあたりまえと思っていたけど、感謝しないといけないと思いました。これからも絵や文字を書きつづけて欲しいと思ったし、家族を大事にしていって欲しいと思いました。とてもいい話を聞かせてもらいました。ありがとうございました。

夜のディベートでは『男・女の生き方』について話をし、意見を出し合ったりして、年上の人の意見を聞いたりして一つの質問でもいろんな考えがあるんだと思いました。自分も発表したりして、まだ高校一年だったのでどう発表していいか分からない質問もいくつかありました。年が上の人ほど考え方が現実的で自分は理想論しか話できませんでした。今回のセミナーでは、日頃考えないことを考えさせられていい経験ができて良かったと思いました。

ライラに参加して　　佐賀西ＲＣ　永田　誠

ライラに参加するのは、周りの人が社会人ばかりだったから正直嫌だった。

集会が終わって宿舎に向かうと、ローターアクトの方々が座っていた。挨拶を互いに交わしたら、ローターアクトの方が、自分たちの事で話を聞かせてくれた。会社に入ったら遊ぶ時間がなくなってしまうから、今の内に遊んでおいた方がいいとか、会社は宿舎があった方がいいとか、それらの話は今年就職をする僕にとって、とても参考になるし、職場を選ぶのにとても役立つ話ばかりだった。それらの話を聞かせてもらって、とても嬉しかった。宿舎の中でも他の人から話を聞かせてもらったり、親切にしてもらえたり、他校のインターアクト部員とも話ができて、楽しい活動だった。夕食の時も一緒に食べようと言ってくれたりしてとても楽しかった。

グループディスカッションの時にみんなで、話し合いをした。その時の話し合いの途中、インドネシアから来た人の話で、自分の国は戦争で金を使いすぎて募金に頼らないといけない大変な状況であると聞かせてもらって、外国の方も大変な状況であることを知った。グループディスカッションの話し合いは、ローターアクトの方々の話し合いのレベルが高く、とても話し合いに参加できるものではなかった。グループディスカッションの話し合いが長引いて自分達の宿舎の中ですることになった。作業は更に続き、消灯時間も超えるものだった。だから話し合いや宴会などがあって、煙の匂いなどローターアクトの人たちには悪いけど、とても寝苦しいものだった。

次の日、出来上がった発表を聞いてみると、とても勉強になるものばかりだった。だから今回の活動に参加して本当に良かったと思った。他校の人との話や会社の人との話を聞かせてもらうなど、いい活動だからぜひ続けて欲しい。

ライラに参加して　　佐賀西ＲＣ　石丸　誠

今回僕がこのライラに参加して一番意味があった事は、自分より年上の人々の話を聞けたことだと思います。それは、僕はまだ学生で今の会社の状態などを直接は知らず、この機会に今の会社がどうなっているのかを聞けたことで、やはりそれが今回の一番の収穫だと自分の中で思っています。

もう一つこのライラで感じたことは、外国人の人たちとの交流で、自分は全く英語を話す事ができないけど同じ部屋のアメリカ人の人に話しかけられた時に、口では日本語を話していて何とか伝わるように手を動かしていると何とか伝わって話をすることができました。僕はこの事でとても深い感動を感じた気がします。それは僕は、まったくといっていいほど英語には弱く、外国の人がいるだけでもドキドキしていたのに、今回の事でそういった不安が全くではないけど、少しなくなったような気がします。けど僕はそれだけでもとても大きな進歩だと思うし、普通では経験できないことなので、このライラに参加して良かったと思います。

ライラのプログラムの中でパネルディスカッションがあり、僕たちは『男の生き方・女

の生き方』という事で話し合いをしました。その話し合いの中で、結婚というテーマで話し合いをしていた時に、僕はまだ結婚について深くは考えたことがなかったのでうまく答えることはできなかったけど、自分なりの考えを発表した時に、グループのみんなが僕の考えについて一緒に考えてくれた時に、とても嬉しくて最初はあまり乗り気でない感じで参加していたけど、自分の発表を聞いてくれてみんなの発表を聞いているうちに、だんだん楽しくなってきて、2時間位があっという間に過ぎたような気がしました。

今回ライラに参加して良くなかった点もない事もないけど、良かった点のほうが多くあり、2日間終わった時にはとても満足していて、これから自分が就職していくにあたって、今回学んだことを活かして頑張っていきたいと思いました。

第２３回ＲＹＬＡに参加しての感想　　松浦ＲＣ　　光田　淳

このセミナーに参加するまで、正直ロータリークラブの主旨や活動内容を全く知らなかった。セミナーでの研修内容も予想がつかなかったが、ただ、せっかく参加するのだから謙虚な気持ちで積極的に取り組みたいとは思っていた。

最初に大野勝彦氏の講演があった。非常に充実した笑顔を浮かべながら、時にユーモラスに話される大野さんの言葉は非常に感動的であり、やる気があれば何でもできると強く励まされたような気がした。

その後、マグカップの絵付けを行った。このマグカップには、大野さんの素敵な絵をプリントして頂けるため、特に自分で何も書かなくともよいという事であった。私は絵が下手であると自分で認識しているため、迷ったがとりあえず記念になれば良いと思って、懸命に書いた。思ったよりもそれはずっと楽しかった。

夜は『男の生き方・女の生き方』というテーマについてグループディスカッションをした。あまりに漠然としたテーマであり、またほとんどの人が初対面ということもあって、最初は意見が全然でなかった。私はこの気まずい雰囲気が実に嫌で、できることなら集中して短時間で終わりたいと思っていたので、司会に立候補した。幸い、班のみんなはすごく協力的で、充実した議論と発表ができたと思う。

あっという間に2日間のセミナーは終了した。何事にも自発的に取り組めたこと、そして何より、普段の生活ではまず話す機会のない他の業種の方々、あるいは学生達と寝食を共にし、打ち解けて意見を交わすことができたことがすごく良かったと感じる。これらのことがそのまま、ロータリークラブの主旨、目的といえるのではないかとも思った。

第２３回ＲＹＬＡ研修を終えて　　松浦ＲＣ　　大保　徹

今回初めてＲＹＬＡの研修に行った。社会人になり松浦に来て、もう2年ほどになる。今までＲＹＬＡの名前すら知らず、参加する前はいったい何をするのであろうかと不安であった。

土曜日、ロータリー関係者と共に佐賀県黒髪少年自然の家に入った。私は今は小倉に実

家があり、小さい頃は子供会等でいろいろな少年自然の家に行った事もあったので、おそらく黒髪少年自然の家も同じような環境であろうことは想像していた。やっぱり想像通り何もない。純粋に研修をするための施設であった。しかし、今考えるとこの何もない環境のおかげで他のロータリークラブの方と交流が持てたのではないかと思う。

２日間いろいろな行事があったが、印象深いのは大野勝彦氏の講演「天命に生きる」と、グループディスカッションであった。大野勝彦氏は農作業中に両手を失われた。両手を失うことで多くの人に迷惑をかけたが、逆に他人に対する感謝の気持ち、生きることに対する歓びに気付かされたとしきりに言われていた。これは両手を失われた大野氏だからこそ気付かれた究極の答えであり、とうてい今の私ではそこまでたどりつけないなと思った。また、今まで漠然と２４年間生きてきたなとも感じさせられた。夜にはグループディスカッションがあった。テーマは『男の生き方・女の生き方』。私は、グループ２であった。メンバーは、私の他に社会人の方もおられれば学生の方、留学生の方もおられるという幅広いメンバーであった。私はグループ２で、２番目に年上であった。そのためどちらかと言えば、昔の男の考え方に近かった。つまり「男は働く、女は家庭を守る。子供がいればなおさらである」という考え方であった。１番年上の男性の方も私と同様であった。案の定、女性の方は「家庭は、男性女性お互いで守るべきもの。女性も社会で働きたい」という考え方をもっておられた。しかし、若年の男性も女性の意見と同様の事を言われた時には、世代の壁というものを痛感した。今回、直接若年層の考え方を肌で感じることができ、大変有意義であった。

２日間の研修で人生を改めて見直すことができ、他人の考え方を感じることができ、また私以外の社会人、学生と交流を持つことができ、良かったと思う。今後貴重な経験となるであろう。

佐世保北ＲＣ　　中島　理恵

今回初めてＲＹＬＡセミナーへ参加させて頂きました。ローターアクトには入っていましたが、セミナー等は全く経験ありませんでしたので、最初はよく分からず戸惑いましたが、ガイドブックに書いてあったＲＹＬＡの誕生、ＲＹＬＡの主旨などでだいたいの事が理解でき、セミナーへ入っていくことができたと思います。いろいろなプログラムが組んである中で、一番心に残っているの、大野勝彦氏の記念講演です。誰にでも起こりうる事故（事故の種類はいろいろかも知れませんが）をきっかけに自分の生き方の変化をとてもわかりやすく、ユーモアも交えて話され、聞き入ってしまいました。また同時に、もし自分だったら・・・・と立場を置き換えて考えることもでき、忘れかけていた「まわりの人への感謝の気持ち」を思い出させてくれた講演でした。また描かれた絵も大変心をなごませてくれました。私自身、この記念講演で感じたことを大事にし、これからの生活、仕事などで役立てたいと思います。

RYLAに参加して

佐世保中央ＲＣ　　指山　立

今年で２回目のライラ。昨年とはうって変わってＴＶも売店も何もない所で、中学校時代の宿泊訓練を思い出しました。たまにはこういうのもいいかな。と思いました。

同室のメンバーにも恵まれ、いい友達づくりと思い出づくりができました。初日の絵付けと講演。すばらしい企画とセッティングで充分楽しませて頂きました。慣例のグループディスカッション。見ず知らずの人達といきなり討論をするというスゴイ企画ですが、初めは辛いものの一度火がつくとみんなガンガン意見を言い、終わってみれば昨年同様に、満足感を得ていました。何がおもしろいか考えてみると、様々な人の考え方を知ることができること、２時間の間でそれぞれの性格が見えてくる所。知らない者同士でやり遂げられたことに対する充実感だと思います。ただ１つ納得がいかないのは、２日目に発表する人が１人である、という事です。発表者以外の人はディスカッションが終われば、それで終わり。みんなでどう発表するか、どう分担するかまでやってこそが、完成形だと思う。リーダー育成である以上は、みんな最後まで責任をもってやり遂げるべきだと感じます。人前に立って話したり、そのドキドキ感を味わうだけでも、リーダーに一歩近づけるのではないでしょうか。

ＲＹＬＡに参加して　　向陽高校　　田﨑　麻美

私は初めてＲＹＬＡに参加しました。不安と緊張でいっぱいでしたが、時間が経つにつれて少しずつ慣れていき、色々な方と行動したり、お話をすることができて、とても良い経験となりました。中でも一番印象に残っているのは、大野勝彦先生の講演です。先生の講演を聞いて改めて人間の真の強さ、そして逆境に立ち向かうことの大切さを学ぶことができました。また、家族の有り難さを感じることもできました。大野先生の話を聞き、実際に自分がそういうような状況に追い込まれたらどうするだろうかと考えてみたけれど、全く想像もつきません。もしかしたら死を選ぶかもしれません。

私は今、看護婦を目指して勉強し、病院実習に行かせてもらっています。実習で援助した患者様の中には切断をしなければいけないと告知された方もおられました。そのたびに私は、自分なら耐え切れずに死を選ぶのではないかと考えていたけれど、大野先生の話を聞いて、そんな自分が恥ずかしく感じました。これからは命の大切さや重さについてよく考え、このような患者様を救うことができるように今日の講演で学んだことを活かして実習を頑張っていけるようになりたいです。

そして、最も勉強になったのはディスカッションです。テーマがとても濃い内容で、２時間という短い時間のなかで、結論まで導き出さなければいけないのでとても難しかったです。しかし、普段は滅多に会ったり、お話できない方や他国の方の意見を聞けたのでとても良かったと思います。また、沢山の社会人の方がおられるなかで意見を言ったり、発表する機会を与えてもらえたので自分にも自信がつき、積極的に行動することができました。

それら以外のことでも、色々な方と交流ができてとても嬉しかったです。２日間というとても短い時間でしたが、色々な方と接し、意見を交換することができるようになり、少しですが考え方等が変わり、成長することができた様に思えます。

このような機会を与えてくださったロータリーの方々に深く感謝しています。またこのような機会があったら、是非参加したいです。

ライラ実行委員会様　　松浦ＲＣ　事務局員　中村　京子

春の風が心地よい季節となりました。何かとご多忙のことと存じます。

先日は、ライラで絵付したマグカップをお送り頂きありがとうございました。私は、松浦ＲＣで事務のお手伝いをしております中村京子と申します。今回のライラに私の息子中村豊が参加させていただきました。豊にとって大変得るものが大きかったようです。大野さんの講演では感動し、絵付けでは楽しみ、ディスカッションでは大いに議論し、非常に有意義な経験、体験をさせて頂いたようです。更に、多くの方たちと知り合えたし、グループの方たちとの出会いは、今後大切にしたいと言っております。

多少なりともロータリーに関わっている私としては、今回息子をライラに参加させたことは大成功だったと、ライラ実行委員会の方々や、息子の参加にご理解頂いた当クラブの会長、新世代委員長に心より感謝申し上げたいと思っております。

今回私は、ロータリー事務局員としてではなく、一人の母として、ライラ実行委員会、鹿島ＲＣの皆様に「ありがとうございました」と、お礼を申し上げさせていただきます。

受講者代表の挨拶

長崎ローターアクトクラブ　戸　村　大　助
（次期ローターアクト代表）

皆さん、お疲れ様でした。ＲＹＬＡ（青少年指導者養成セミナー）ということで、毎日が違った環境の中で生活している皆さんに集まっていただいた訳ですが、会社側から無理矢理「行け！」と言われて来た人。あるいは自主的に手を上げて来られた人。学校（高校）から言われて参加された人もおられると思います。昨日の大野勝彦先生の詩画集の中に「目的地はいっしょ、でも感動出来る人と、出来ない人が」という詩がありました．今回のＲＹＬＡでも、目的は皆さんいっしょなんですよね。ただ、そこで何かを得ることが出来る人と、出来ない人がいるんじゃないでしょうか。これから何かをやろうとする時に、自分から進んで“ヤル”という意識づけのきっかけを、このＲＹＬＡで掴んで戴ければいいのではないかと思います。無理矢理させられるのではなくて、どうせやるんだったら自分達から「よしやろう！」という気持ちを持っていただければ、これからもっと伸びて行くことでしょうし、又、どうせ参加するんであれば「ＲＹＬＡとは何なのか」ということを勉強して来てほしいと思います。ただ「行け！」と言われたから来てみた。だけど「こんなものだったのか」と言うより、事前にＲＹＬＡのことについて少しでも勉強していれば、もっともっと実になることが大きいんじゃないでしょうか。最後になりましたが、今回のＲＹＬＡを開催していただきましたホストクラブの鹿島ロータリークラブを始めとする、ロータリアンの皆様に厚く御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

受講者を代表致しまして御礼を申し上げ、挨拶にかえさせていただきます。

講　評

ＲＹＬＡ地区委員長　吉牟田　茂
(佐世保中央ロータリークラブ)

皆さん大変お疲れ様でございました。
今回、第２３回目のＲＹＬＡに多数ご参加戴きまして誠にありがとうございました。
先程終了証書をお渡し致しましたが、これはローターアクト、インターアウト、一般の方、それと留学生、それぞれ４名の代表の方に出て戴きました。ということは、そういう団体の方々にご参加戴いたものと思っております。

私もこの４～５年、ロータリーでＲＹＬＡの実行委員長や地区委員をやって来ましたが、先程挨拶された戸村君の話ではございませんが、最初は“やらされている”という意識でやっておりましたが、この２年程は楽しくてしょうがありません。今回はこの大自然、黒髪山の麓ということでございますが、その時、その時の開催地によって会場も変わり環境も違って参ります。昨年はテレビや、自動販売機もありました。一昨年、波戸岬でやったときも、ロビーにはテレビもあり、新聞もありました。今回は皆さん丸２４時間、そういったものが全然ない状況の中で、先程は、グループディスカッションの発表の中にもありましたように、自然環境の保護とか、ゴミ問題とか、この黒髪の自然環境を満喫しながら、今迄とは又、違った意味での研修が出来て勉強にもなったかと思います。

ただやっぱり一つ残念だったのは、途中で施設の方から指摘を受けましたゴミの問題、ふとんのたたみ方、私も自分の部屋に戻って見たらちやんとたたんでおりませんでした。何の為にたたみ方が書いてあるのかなあ。と考えました時に、これも一つの訓練であったんだなあと、いうことで、あの時間にご指摘して戴いて良かったんじゃないかなぁと皆さんもそう思われたと思います。改めて、又見回って見ましたところ結構ゴミが出ておりました。これだけあれば「やっぱり言われてもしょうがないなあ。」と感じました。まぁそういうことでの反省すべき点もありますが、昨日の大野勝彦さんの講演から始まりまして、焼物の絵付け、グループディスカッションでの皆さんの真剣な討議、それから今日の発表と、この２日間この環境の中で貴重な体験をされました。おおいに今後の人生に生かして戴きたいものと思います。

最後になりましたが、今回のホストをしていただきました鹿島ロータリークラブのメンバーの皆様、コ・ホストの嬉野、武雄、有田の３ロータリークラブの皆様方に大変感謝を申し上げます。

講評になったかどうか分かりませんが、来年も又２４回目のＲＹＬＡが地区内で開かれます。是非もう一回参加してみようという気持ちをお持ちになってお帰り戴ければ幸いです。

２日間お疲れ様でした。

挨　拶

第23回ＲＹＬＡ実行委員長
鹿島ロータリークラブ　山　口　健　一

皆様、２日間の研修、大変お疲れ様でした。ロータリーの提唱の中に「四つのテスト」というのがあります。これは国際ロータリー50周年度の会長ハーバード．テーラー氏が提唱しています「四つのテスト」

１．真実かどうか
２．みんなに公平か
３．好意と友情を深めるか
４．みんなのためになるかどうか

これは職業の社会的意義の認識にあると言われています。職業には生活の「糧」を得るための利潤の追求を目的としています。職業は人間が社会生活を営むために必要な分業を分担することであり、その報酬として利潤が与えられるのです。そこで当然のこととして責任と誇りが生まれる、この責任と誇りを堅持するためのチェックが「四つのテスト」です。

今日のディスカッションのテーマ「21世紀をどう生きるか」、「男の生き方、女の生き方」で皆さん方は、自分が、又世界が幸せで豊かになること、と考えた人も多いと思います。

幸せになる人って、どんな人だろう！

私は幸せになる人は親切で、思いやりのある人、一生懸命にやる人、目標や夢を持ち続ける人、そんな人ではないかと思います。「幸せ」は自分の持っている力（価値）を自覚した時に生まれる喜びと感謝だと思います。又「豊かさ」とは知識、知恵をたくさん持っている人、「富む」とは人の為になる働きをする何かが多いこと。人の為になる働きをするのが愛であって、それを実践すれば、それが富に変わっていく、まさしくロータリーの提唱する「四つのテスト」そのものと思います。争いのない明るい豊かな社会を創るため皆さん一人一人が、今言った「四つのテスト」、「真実を見つめ」「公平に」「友情を深め」「人のためになる」そんな人間に育っていただきたいと思います。

最後になりましたが、第23回ＲＹＬＡを無事終えることができましたのも、企画、準備をしていただきました、鹿島ロータリークラブ実行委員の皆様をはじめ、コ・ホスト、ＲＹＬＡ地区委員、又ご講演をいただきました大野勝彦先生、その他関係の皆様のご努力、ご協力の賜物と厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

閉講の言葉

次年度ＲＹＬＡ地区委員長
鹿島ロータリークラブ　蒲　原　孝　之

昨日、今日と２日間に亘っての青少年指導者養成セミナー、皆さん方如何だったでしょうか？今回のセミナーには１５０名の青少年男女の方々と、２５０名のロータリアンの皆様が出逢った訳でございます。私達にとって、この２日間は、本当に忘れられない素晴らしい貴重な体験ではなかったかと思います。この体験の中から何か一つでも得るものがあって、今後の皆様方の人生におおいに活用して戴ければ、今回のセミナーが更に役立つものと考えるところでございます。

次年度は佐賀市付近のロータリークラブの方にホストをしていただき、その地域でこの季節に開講をする予定になっております。

この青少年の中にも「２回、３回と参加をした。」という方もいらっしやいます。どうか今回ご参加いただきました皆様方には是非、来年も引き続き多くのお知り合いの方を誘い合って、佐賀の地においで戴きますよう私達心からお待ち致しております。

今回のこの友情を、お互いに大切にして、それぞれの地域でリーダーとして、いろいろな面でご活躍を、又、ご研鑽を積まれることを祈念申し上げ、最後になりましたが、ホストクラブ、コ・ホストクラブの方々、又、関係者の皆様、この施設の皆様方に心から感謝を申し上げ、簡単でございますが閉講の言葉とさせていただきます。

来年又、元気でお逢いすることを楽しみに致しております。

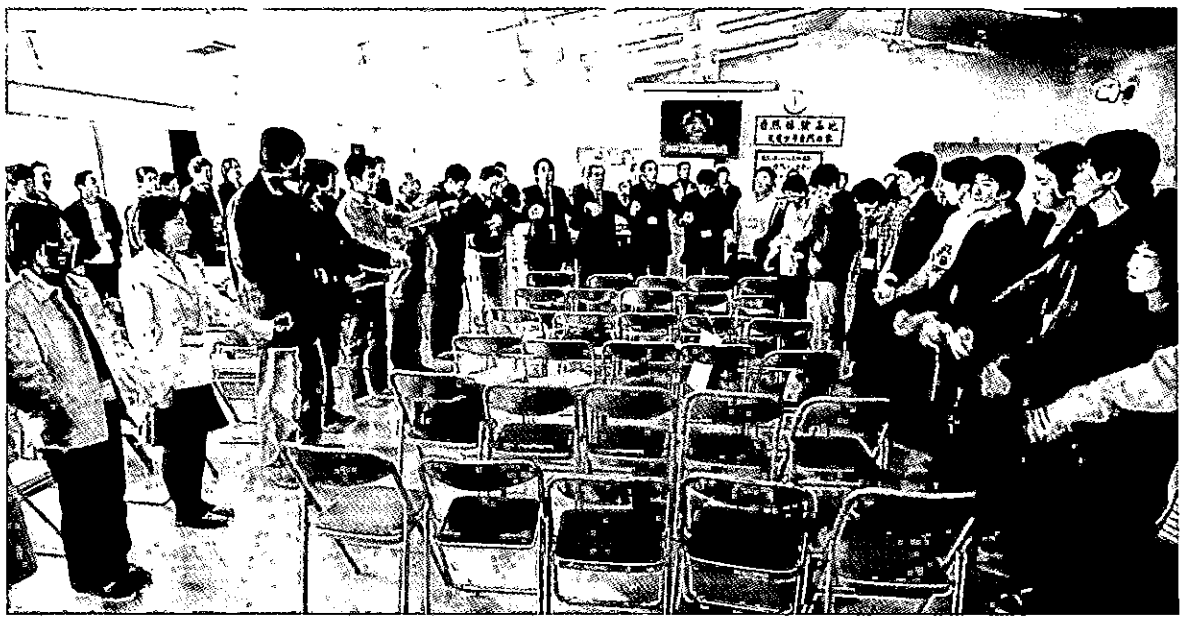
ではお別れします。お疲れ様でした。

奉仕の理想

作詞　前田和一郎
作曲　萩原英一

奉仕の理想に集いし友よ
　御国に捧げん我等の生業
望むは世界の久遠の平和
　めぐる歯車いや輝きて
永久に栄えよ
　我等のロータリー

“来年のRYLAにてまた逢いましょう”



手に手つないで

作詞・作曲　矢野一郎

一、手に手つないで　つくる友の輪
　輪に輪つないで　つくる友垣
　手に手　輪に輪
　ひろがれ　まわれ　一つ心に
　おゝロータリアン　おゝロータリアン
二、手に手つないで　つくる友の輪
　輪に輪つないで　つくる友垣
　手に手　輪に輪
　ひろがれ　まわれ　世界と共に
　おゝロータリアン　おゝロータリアン

2001－2002年度
国際ロータリーのテーマ

MANKIND
IS OUR BUSINESS
人類が私たちの仕事

第23回 RYLA登録者名簿
国際ロータリー第２７４０地区

ガバナー	福井　順	長崎南ＲＣ
ＲＹＬＡ地区委員長	吉牟田　茂	佐世保中央ＲＣ
ＲＹＬＡ地区委員	和田　正治	唐津西ＲＣ
	福島　隆暢	佐賀大和ＲＣ
	蒲原　孝之	鹿島ＲＣ
	古瀬　亨	島原ＲＣ
	猪口　紀州	長崎中央ＲＣ
ＲＹＬＡホストクラブ会長	濱松　和夫	鹿島ＲＣ
ＲＹＬＡコ・ホストクラブ会長	山下　裕	武雄ＲＣ
	三根　俊一	嬉野ＲＣ
	嘉村　泰幸	有田ＲＣ
ＲＹＬＡ実行委員長	山口　健一	鹿島ＲＣ

ロータリアン

唐津・伊万里地区

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
唐津	鈴木健一	
伊万里	湯越義文	5－1
	樋渡徳美	
	川原丈司	5－1
唐津東	遠藤豪通	5－1
	都市右太雄	5－1
	重松武文	
唐津西	和田正治	
	瀬戸伸雄	5－1
	鶴丸進	5－1
伊万里西	池永晃一	
	小島智	
	野田幹雄	
唐津中央	小松重昭	
	中山和義	
	村山優	5－1
	松永智大	5－1
	梶原正和	5－1

佐賀地区

佐賀	大島隆	3－5
	大坪恵介	
佐賀西	森永浩通	
	大塚良弘	
小城	松本高明	

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
佐賀北	吉岡政弘	
	吉田裕一郎	
多久	森上正成	3－5
佐賀南	藤井義博	3－5
	溝上宏	
神埼	埜口章順	
	宮島清	
佐賀大和	福島隆暢	
	上瀧忠吉	
	上野倫五	
	浦川容伸	

有田・杵藤地区

有田	池田人昭	5－2
	岡部景光	5－2
	中山武夫	5－2
	嘉村泰幸	
	徳永一雄	5－2
	橋口正	5－2
	福田泰作	
武雄	山下裕	
	田中紘一	
	木寺幸生	
	花田晴年	
	浜田愃	
嬉野	江口直人	
	中野賢司郎	

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
嬉野	菅田健一	
	原田恒俊	
	山口孝四郎	
	中島修	
	三根俊一	
大町	諸石一三	3－5
	山本武	3－5
	野口良治	3－5
	西川宏	3－5
白石	服部正義	
	山口繁喜	
	大田尾一美	
太良	山口渡	
	髙木茂	
鹿島	愛野時興	
	愛野宏	
	阿部清光	
	馬場謙吾	5－4
	馬場泰造	5－3
	藤永勝之	
	藤松直文	
	花島光喜	
	濱松和夫	3－1
	稗田晋吉	
	石橋利康	
	今村博	
	蒲原孝之	3－1
	北古賀正昭	
	国広武治	
	久保英継	
	小池浩一郎	
	幸尾孝之	3-リーダー室

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
鹿島	松尾公洋	5－4
	峰松幸弘	
	迎雅瑠嗣	5－3
	森田常正	
	森田峰敏	
	中尾廣次	5－4
	中村一之	5－3
	中村邦子	
	鍋島朝倫	
	大塚清信	5－3
	大隈末義	
	折敷瀬三徳	5－4
	大坪稔	5－3
	岡興一郎	5－4
	小笠原平吾	
	小川澄寛	5－3
	小川弘水	
	力田賢次	
	白川歳雄	
	住江潤子	
	高木敏博	
	高木豊	
	立川勉	
	辻野正勝	
	寺川定男	5－4
	徳村竜二	5－4
	冨永寅雄	5－3
	上田隆史	
	山口健一	3-リーダー室
	山口真護	
	山口修二	5－4
	山口光一	
	吉田祐彦	4-リーダー室
	米倉保治	5－3

登録者名簿

長崎県北地区

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
佐世保	古賀　巌	
	新穂博文	
	菅沼宏比古	
	円田　昭	
	千住雅博	
	梅村良輔	
	本岡　豊	
佐世保南	圓田　治	
	水上哲郎	
	丸田東一	
	小川　信	
	岩永史城	
佐世保東	小松屋芳雄	
	新井成光	
	志水孝明	
佐世保西	前川一雄	
	藤巻義孝	
	浜田和明	
松浦	緒方　進	5－2
	小田　浩	
	小松千秋	5－2
佐世保北	永田武義	5－2
	隈本幹彦	5－2
	馬場幹也	5－2
佐世保中央	古賀純男	
	坂井智照	
	岩政　孝	
	伊賀克英	
	野村和義	
	平瀬　栄	
佐世保中央	前田眞澄	
	溝上純一郎	
	矢野正信	
	吉牟田　茂	3－1
佐世保東南	松田士郎	
	土居泰利	

長崎県央・島原地区

大村	俣野正仁	
	西川義文	3－3
諫早	松原　究	
	山田和弘	
	谷川則仁	
	中尾通明	
島原	古瀬　亨	3－1
雲仙	吉原国康	
	横田俊之	
大村北	西田　猛	
	浦田直彦	
諫早多良見	堀川雄一	
	松本尚武	
	中村克三	
諫早南	西岡和博	
	吉村忠克	

長崎県南地区

長崎	吉田正和	3－1
	浦田忠秋	
	牧野二朗	

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
長崎北	入江良明	
	内田　一	
	松尾正洋	3－3
長崎南	末永建男	3－3
	鳥居丈平	
	末永　稔	
長崎東	中富武満	
	黒部勝則	
	今村豊親	
長崎北東	野村安伸	3－2
	岩永信昭	3－1
東長崎	松尾眞一	3－2
	西岡英一	3－2
	小川　徹	3－2
	尾崎　隆	3－2
	多良正治	3－2
	多良龍一	3－2
	吉田　稔	3－2
	渡部芳信	3－2
長崎西	柳　信良	
	久保昌二	
	栗原博志	3－4
	馬渡　誠	
	夏井　淳	3－4
	林田晋二	
	牧　文春	3－4
	日高豊久	3－4
	許斐義彦	3－4
	山川　晃	3－4
	笠間富嗣	3－4
	島田靖彦	

クラブ名	氏　名	部屋（号数）
長崎西	深堀俊一	
	熊澤　悟	3－4
	有森重俊	3－4
	劉　済昌	3－4
長崎中央	中野　廣	
	麻生光雄	
	一瀬圭二	
	井筒亮平	
	猪口紀州	3－1
	小川一廣	
	西迫廣巳	
	西田勝成	
	吉田茂視	
	中島熊雄	
	田平賀二	
	光永義久	
	鍵山日出幸	
	川添一巳	
	高津喬雄	
	高田祐治	3－3
	田上敬文	
	塚崎　寛	
	松本総一郎	
	前田　稔	
長崎琴海	田中一広	3－3
	溝口茂幸	3－3
長崎出島	高谷信一	3－3
	山形浩介	3－3
	松谷和彦	

青　　年

唐津・伊万里地区

クラブ名	氏　名	部屋（号数）	グループNo
唐　津	古賀英輝	1－2	2
	加世堂　敦	1－5	5
	戸川健士	2－4	9
	松本孝行	1－3	3
伊万里	山口　彩	4－3	6
	大野史保子	4－4	8
	吉田真綾	4－2	4
唐津東	緒方哲哉	2－2	7
	平田優子	4－2	3
	門田　豪	2－5	10
	松本美恵	4－5	9
唐津西	古家隆弘	1－4	4
	多比良　剛	2－1	6
	三隅英人	1－1	1
伊万里西	岩永弘志	2－3	8
	坂口　正	2－2	7
	山口　香	4－1	2
	ﾊﾕ･ｻﾔｸﾃｨﾆﾝｸﾞ･ｱﾃﾞｨ	4－5	9
唐津中央	藤田　亮		7
	古川義章		1
	白津幸哉		6
	浜口達成	2－5	10

佐賀地区

佐　賀	ﾙｼｰﾙﾄﾞｳﾋﾞｯｼｬｰ	4－2	4
	古賀元樹	2－5	10
	嬉野静香	4－4	7
	水崎和幸		8
佐賀西	永田　誠	2－4	9

クラブ名	氏　名	部屋（号数）	グループNo
佐賀西	石丸真琴	1－2	2
	田久保かおる（ＩＡＣ顧問教師）	4－3	顧問教師
	副島大輔	2－1	6
小　城	久原和也	2－4	9
	田中伸明	2－5	10
多　久	冨永健治	1－5	5
	大石容正	1－1	1
	今泉知子	4－4	8
佐賀南	鹿毛理恵	4－1	1
	鄭　雅方	4－4	7
	Kees DE RAAF	1－5	5
	小副川博樹	1－4	4
	藤原幸司	2－3	8
神　埼	宮原章彦	1－2	2
	宮原研一	2－5	10
佐賀大和	瀬戸口貴子	4－4	7
	萩原亜矢子	4－2	3
	上野綾花		8

有田・杵藤地区

有　田	山口真吾	2－1	6
	志水章弘	1－3	3
	奥山久夫	2－4	9
	山崎英哉	1－5	5
	ラファエル	2－5	10
	馬場千尋	4－2	4
	手塚貴子	4－1	1

クラブ名	氏　名	部屋(号数)	グループNo
武　雄	山　口　祐美子	4－3	6
	吉　田　浩　史	1－1	1
	Matthew Huster	2－3	8
嬉　野	大古場　崇　幸	1－3	3
大　町	小野原　聡　子	4－4	7
	山　口　由　香	4－2	4
	山　口　真　耶	4－1	1
太　良	ウ　ル　ビ　ィ	4－5	9
鹿　島	井　上　浩　樹	1－5	5
	古　賀　竜　介	2－3	8
	渕　野　達　弘	1－1	1
	山　口　　剛	2－4	9
	大　島　ルミ子	4－5	10
	桑　原　賢太郎	1－2	2
	森　永　舞　子	4－2	3

長崎県北地区

佐世保	大　神　吉　史	2－2	7
佐世保南	ウェレン・クリストファー	1－5	5
佐世保東	田　中　長一郎		10
	吉　村　理　沙		
	山　下　祥　子		
佐世保西	鄭　　聲　愛	1－4	4
	モハマド・サルワル・アラム	1－1	1
松　浦	光　田　　淳	2－1	6
	大　保　　徹	1－2	2
	中　村　　豊	2－4	9

クラブ名	氏　名	部屋(号数)	グループNo
佐世保北	富　永　泰　弘	2－2	7
	中　島　理　恵	4－2	3
	周　　牧　音	4－1	2
佐世保中央	吉牟田　研二郎	1－4	4
	指　山　　立	2－4	8
	ナザニエル・ア・ボンド		

長崎県央・島原地区

大　村	野　中　さゆり	4－3	5
	中　村　聡　美	4－5	10
	田　﨑　麻　美	4－1	1
	増　田　愛　子	4－4	8
	網　　飛　鳥	4－1	2
諫　早	Virada Prabharasuth	4－1	2
	永　川　美　和	4－2	4
	馬　場　栄　喜	1－3	3
	山　口　昌　子	4－5	10
	橋　口　洋　介	2－1	6
島　原	安　部　紀　孝	1－1	1
	隈　部　和　幸		
	杉　永　ル　ミ	4－5	9
諫早多良見	Anita Poultnty	4－3	5
	東　　千　代	4－4	8

長崎県南地区

長　崎	金　子　公　隆	1－5	5
	戸　村　大　助	2－1	6
	原　口　忠　浩	2－3	8
	レルーヴァン	4－2	3
	川　端　俊　介	2－3	8

登録者名簿

クラブ名	氏　名	部屋(号数)	グループNo
長崎北	北川武志		
	松尾三智子		
	ﾀﾇｱｰﾄ・ｳｨﾘｱﾑ・ｱﾘﾌ	2－4	9
長崎南	吉村伸次		
	津村美江		
	山本綾子		
長崎東	中村大郎		
	中島康博		
	荒木純弘	1－1	1
	山代一寛	1－3	3
	松野ひろみ	4－5	10
	山下勝利	2－1	6
	藤　幸一郎	2－4	9
長崎北東	野村那津子	4－1	2
	ｲﾙﾌｧﾝ・ﾛﾝﾄﾀｰﾌﾞ	2－2	7
長崎西	岩永信司	1－5	5
	登立裕貴	1－4	4
	山口一昭	2－5	10
	山口隆一	2－1	6
	與賀田　誠	1－1	1
	峯　眞一	2－2	7
	吉野茂典	1－5	5
	ﾏｲｹﾙ・ｶﾄﾗｰ	1－2	2
	川満隆統	1－3	3
	三浦雄三	1－4	4
	谷山洋平	2－4	9
	中村英輔	1－2	2
	荒木千里	4－3	5
	有森俊太郎	1－4	4
	梅田雄一	2－3	8
	濱崎好彦		

クラブ名	氏　名	部屋(号数)	グループNo
長崎中央	呉　韜	2－1	6
	野口義之	1－3	3
長崎出島	宮村　充	2－5	10
	今畠由香利	4－4	7
	箕内浩介	1－4	4
東長崎	ｲﾜﾔﾝ・ｽﾃﾞｨｱﾅ		3

国際ロータリー第2740地区

第 23 回 R Y L A 決 算 書

（単価：円）

	項　目	金　額	備　考
収入の部	前期繰越金	367,271	
	地区補助金	400,000	
	クラブ負担金	1,740,000	58クラブ 30,000/クラブ
	登録料	1,932,000	
	ロータリアン 1,380,000		230名 6,000円/名
	青年 552,000		138名 4,000円/名
	その他収入	10,017	
	合計	4,449,288	

支出の部	宿泊食事代	687,602	
	会場設営費	207,868	
	受付関係費	133,124	
	ガイドブック代	99,750	
	参加者記念品代	367,500	
	講演関係費	275,250	
	野外活動費	247,115	
	意見交換費	77,080	
	記念誌代	1,197,717	
	会議費	460,210	
	保険料	13,680	
	通信費	84,170	
	事務用品費	52,868	
	印刷代	30,000	
	雑費	61,564	
	次期繰越金	453,790	
	合計	4,449,288	

第23回　RYLA実行委員会組織図

RYLA地区委員長　吉牟田　茂（佐世保中央）

RYLA地区委員　和田　正治（唐津西）
福島　隆暢（佐賀大和）
蒲原　孝之（鹿　島）
古瀬　享（島　原）
猪口　紀州（長崎中央）

司　会　折敷瀬 三徳
司　会　住江　潤子

RYLA地区委員 23回担当委員　蒲原　孝之（鹿　島）

RYLA実行委員長　山口　健一（鹿　島）

ホストクラブ会長	濱松　和夫（鹿　島）
〃	幹事　幸尾　孝之（鹿　島）
コ・ホストクラブ会長	山下　裕（武　雄）
〃	幹事　田中　紘一（武　雄）
コ・ホストクラブ会長	三根　俊一（嬉　野）
〃	幹事　谷嶋 要三郎（嬉　野）
コ・ホストクラブ会長	嘉村　泰幸（有　田）
〃	幹事　徳永　一雄（有　田）

◎委員長　○副委員長

総務・登録・SAA	記　録	会　計	会場設営	救　護	意見交換	野外活動
◎蒲原　孝之　◎松尾　公洋	◎馬場　謙吾	◎久保　英継	◎寺川　定男	◎吉田　祐彦	◎徳村　竜二	◎岡　興一郎
○幸尾　孝之　○小川　澄寛	○馬場　泰造	○大塚　清信	○阿部　清光	○稗田　晋吉	○高木　敏博	○山口　修二
濱松　和夫　米倉　保治	今村　博	白川　歳雄	国広　武治		小川　弘水	中尾　広次
小笠原 平吾　大坪　稔	迎　雅瑠嗣		石橋　利康		峰松　幸弘	中村　一之
山口　光一　森田　常正	北古賀 正昭		愛野　宏		愛野　時興	山口　真護
藤永　昭夫	力田　賢次		花島　光喜			立川　勉
辻野　正勝			大隈　末義			小池 浩一郎
高木　豊			冨永　寅雄			中村　邦子
藤松　直文			上田　隆史			
森田　峰敏			藤永　勝之			
鍋島　朝倫			（嬉野RC）			（有田RC）
			（武雄RC）			
＊意見交換へ協力			案内・駐車場			＊会場設営へ協力

■ 第23回ＲＹＬＡ記録誌 ■

発行日　　平成14年６月30日

発　行　　鹿島ロータリークラブ

佐賀県鹿島市
大字高津原4296-41
ＴＥＬ（09546）2-2624
ＦＡＸ（09546）2-2633

ROTARY
INTERNATIONAL